

次 目

聖訓摘要	本多日生
日蓮宗概觀(其八)	故梶木顯正
開目鈔講話(第九講)	小林一郎
遣教經雜感	笹木欣爾
記事	
○本部團報	○地方教信
○團費誌料等領收	○編輯室より

號月七年二十四第



統

法財人團

統一團發行

### 財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サマル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ露妙會アリ自慶會アリ又知法恩會等アリ其街頭宣傳ノ如キ交々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定樂ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲シ 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持続セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

### 本團畧則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ振興ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

## 聖訓摘要

### 本尊問答鈔

### 本多日生

これは御本尊の事に就いていろ／＼書いてある御書で、大變やかましい御書であります、往々間違ひの起り易い御書でありますから、大事な所を一箇處十分に説明して置かうと思ひます。

答て云く、本尊とは勝れたるを用ゆべし、例せば儒家には三皇五帝を用ひて本尊とするが如く、佛家にも又釋迦を以つて本尊とすべし。問うて云く、然らば汝は何ぞ釋迦を以つて本尊とせずして法華經の題目を本尊とするや。答ふ、上に擧るところの經釋を見給へ、私の義にはあらず。釋尊と天台とは法華經を本尊と定め給へり、末代今の日蓮も佛と天台との如く、法華經を以つて本尊とする也。其の故は法華經は釋尊の父母諸佛の眼目なり、釋迦大日總じて十方の諸佛は法華經より出生し給へり故に今能生を以つて本尊とする也。問ふ其の證據如何。答ふ普賢經に云く、此の大乘經典は諸佛の

實藏なり、十方三世の諸佛の眼目なり、三世の諸の如來を出生する種なり。等云云。(繪圖遺文錄)

これはお釋迦様を本尊としない、法華經を以つて本尊とするのである。それは佛といふものは法華經から生れ出たものであるから、法華經は親で佛は子である、親を本尊とするのであるといふ事が書いてある。これが非常な面倒な問題になつて來たのであります。この『本尊問答鈔』の法華經が親で佛の子であるといふ場合の佛は、本佛ではないのであります。本佛といふのは壽量品を御覽になれば判りますが、一切の本になつて居るものであつて、お自我獨に説いてある所の「常に法を説いて無數億の衆生を教化して」と言はれる、その教化の其處に法華經があるのである、「常説法教化」といふその説法が法華經になつて來る譯である。この法華經に依つて教はれて、茲に佛が出来る、その法を常に説くと言つて法華經を説く所の者が本佛である。お自我獨にある所の「我佛を得てより來、經たる所の諸の劫數、無量百千萬、億載阿僧祇なり、常に法を説いて無數億の衆生を教化して佛道に入らしむ」で、その教化せられた所の者が澤山の佛と成る、その教化した説法が法華經であつて、その説法をした佛が本佛である。佛も何も無い前に説かない所の法華經があると云つたならば、それは唯だ實相の理があるのであつて、本當の法華經といふものは本佛よりして現はれて來る所のものである。大體法華經と言つても、文字といふやうな事は後に出て來ることでありますが、法の本體といふものは「三法」と申して心か、衆生か、佛であります。即ち心法、衆生法、佛法であります。吾々の心か、總ての迷へる者か、佛

かこの三つである、之れを法といふのであつて、この外には法といふものはない。さういふ事を説いたものが、それがお經となつて居るのである。さうするとこの三つの中でどれが一番えらいかと言へば、佛様が一番えらいと言はなければならぬ。だから妙法の法と言つて見た所で、その本質は佛様に成らなければならぬ譯である。若し唯だこれが吾々の心ぢやといふやうな事になれば、心はえらいけれども未だ悟つて居ないものであるから、それは晦日の月も十五夜の月も、月としては同じものだけれども、光の方からいへば非常な違ひがあるやうなもので、十五夜の月は萬里を照すものである、併し本體をいへば晦日の月も十五夜の月も同じものだと云へる、そこで根性の拗けた者が「晦日の月が親で十五夜の月は子である、晦日にオギャツと生れて段々大きくなつて十五夜になる、十五夜の月の親は眞ッ暗な晦日の月ぢや」といふ、斯ういふやうな風に考へるといふと、佛が子だといふやうな議論が出て來るけれども、そんな思想は本當のものではない、皆中途半端の思想である。壽量品に入つても決して佛が子だとは仰しやらない「我亦爲世父」と仰しやつた「我も亦これ世の父、諸の苦患を救ふ者なり」と言はれて、決して佛が衆生に對して「お前は親じや、晦日の月見たいに眞ッ暗がりの親ぢや、俺はお前等の子ぢやといふやうなことは仰しやらない、汝等は我が子なりと仰しやる「此の子懲れむべし、毒の爲めに中てられて居る」といふやうに説かれて居る。其處が大事な所である、餘り哲學風な變な所に頭を突込んで考へては駄目ぢや。

であるから斯ういふ場合にいふ佛といふのは、お釋迦様といふ名前があつても皆迹佛であつて、之れを「日向記」といふ書物には「滅歸する佛なり」といはれてある、即ち斯ういふ場合に法華經と比較を取つて、佛よりも法華經が有難いといふ時には、その比較される佛は滅びて行く所の迹佛である、「四聖は滅歸する佛なり」と言つて、滅びて行く佛である、法華經に依れば成佛し、法華經を除つてしまへば生命を失つてしまふものをいふのである。本佛釋尊といふものはさういふものではない、一切の根本に於て常に法を説いて衆生を教化なさつた所の方であるから、假令「本尊問答鈔」に何と書いてあらうが、この壽量品の絶對本佛がさういふ輕いものではないといふ事だけは、能く心得て置かなければならぬ。これはどちらかと言へばやはり天台宗に就いての議論であつて「開目鈔」や「本尊鈔」などよりは低い所の思想と言はなければならぬ。

それからこのお題目の事を序でに申して置きますが、これがどうも法華宗で煩ひをなすのであつて、お題目の中に一切經を入れるとしますと、お題目の中に一切合財何でもあるといふ思想になる。さうするとこれがどうしても萬有神教になる、お題目を拜みさへしたならば何でも皆佛になる、妙法の光明に照されてどんな者でも佛に成るといふ、さうすれば萬有神教である、鬼子母神でも帝釋でもお薬師様でも何でも構はない、皆えらいといふ事になる。それは何でも有るやうだけれども、雜然としてあるのであつて、その間に統一といふものがない「イヤ、お題目で統一して居るといふけれども、それは唯だ

唱へ言葉で、鬼子母神に對つても南無妙法蓮華經、帝釋に對つても南無妙法蓮華經といふので、實に雜然たる所の多神主義、萬有神主義である、これは抑々眞言宗の思想である。そこで日蓮聖人も斯ういふ工合に言うて居る所もあるけれども、これは眞言曼荼羅の思想から來たものであつて、壽量品の精神から來たものではない、壽量品の中心といふものは、茲に良き醫師があつて、さうして子供の爲めに良薬を作つて之れを服ませやうとした。その間に使の人が來て、その薬を飲むべき心得を子供に教へて、子供が之れを服んだといふ事になつて居るのである。その良き醫師が本佛である、使が日蓮聖人である。服むといふことが信仰である、子供といふのは吾々衆生である、この吾々の「南無」といふ信仰の目的は良薬を服むのである。これは醫師の譬へであるから薬と言ひ毒に中てられたる病人といふ事に譬へるのであるが、之れを岸の上と下の人に譬へたならば、佛は岸の上に居る人である、吾々は崖から下に落ち込んで居る者である、この岸の上の人が吾々を救ふ爲めに下げる所の網、この網が題目になるのである、これは日蓮聖人の御遺文の「持法華問答鈔」の中に詳しく説かれて居る、人間が崖から墮ちかゝつて途中に引かゝつて居る、下は深い淵であつて、大蛇が大きな口を開けて今か／＼と落ちるのを待つて居る、自分が獲つて居る崖の木は躑躅のやうな小さな木で、根が動きかけて居る。所が其處に白い鼠が出て來て、その根をゴツ／＼と掘ちくる、それが這入つたかと思つと、今度は黒い鼠が出て來て根を掘ちくる、黒い鼠が這入れれば白い鼠が出、白い鼠が這入れれば黒い鼠が出て來て、時々刻々にその躑躅の根

が浮いて来て、モウ少してその根が抜けてズドンと下へ落ちさうになる、下に落ちれば大蛇が口を開けて待つて居る、實に身の毛の戦慄つやうな恐ろしい有様であるが、其處に崖の上を通りかゝつた人が「可哀さうだ」といふので一本の綱を下げて「この綱に攫まつて來なさい、俺は非常に力の強い者である、この綱も丈夫であるから、お前が綱に確かり攫まつてさへ居れば上に上ることが出来る、お前の手が麻痺れさへしなければ、綱は切れない、自分は下へ引込まれるやうなことはない、お前の攫まへやうが緩いとスポツと落ちるかも知らんから、手が滑らぬやうに元氣を出して確かり攫まつて來い」と言つた、其處でその通りに確かり綱に攫まつたが爲めに救はれるといふ事になつて居る。これは涅槃經から來た譬へであります、人間がこの世の中に住んで居る生命の果敢きことは、丁度今の躑躅の木に攫まつて居る人間のやうなものである、白い鼠といふのは晝の時間を指して居るので、時計がカチ／＼動いて居るやうにこの躑躅の根を掘ちくつて居る、根といふのは人間の壽命のことをいふので、一刻々々と壽命が刻まれていく、白い鼠が這入れれば黒い鼠が出るといふのは、日が暮れて夜の時間をいふので、夜になつても時計はコツ／＼と休まず動いて居るやうに、人間の壽命は日が暮れても少しづつ縮まつて行く、斯くして晝夜間斷なく我が生命は刻々に刻まれて居るといふ事を、躑躅の根を鼠が掘ちるといふ事に譬へたので、この壽命が切れると惡業の因縁を以つての故にズドンと下に落ちて、大蛇に喰はれるやうな洵に淺ましいものである。其處で岸の上に通るかゝつた人といふのは佛様で、何とかして之れを救ひ出

さなければならぬと考へられて、佛法の教を與へた、その教の中の一番善いのが法華經、法華經を釋めて南無妙法蓮華經の教ひの綱として之れを下げた、斯ういふ事である。佛の方からいへば救ひの綱を下げるのであるが、吾々からいへば助けられて上つて行く綱である、この所に南無妙法蓮華經がある、即ち佛と我等の仲介として南無妙法蓮華經といふものはあるのである。これが壽量品の場合に於ては前申した通り綱が薬に譬へられて居るし「本尊鈔」に於ては母親と赤ん坊と乳房といふ事に譬へられて居る何れにしても本佛と我等の間の仲介者である、仲介者として之れを考へれば、茲に絶對の本佛といふものがはつきり判る譯である。さうしてお題目といふものは唯だ五字七字の南無妙法蓮華經といふ事で宜しいことになる、非常に有難い事である。之れを「本尊鈔」の場合に於ては「佛大慈悲を起して妙法五字の袋の内に此の珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けさしめ給ふ」といふ事になつて、佛の大慈悲から、妙法五字を袋に譬へ、それを懸けさしむるといふことになつて、佛・法・僧の三寶がちやんと揃うて居る。この佛様と法と僧といふ佛・法・僧の意識——本佛釋尊を以つて佛寶とし、妙法蓮華經を以つて法寶とし、日蓮聖人を以つて僧寶とする、我れは本佛釋尊に歸依し、法華經に歸依し、日蓮に歸依すといふことが、即ち法華經に依つて三寶に歸依する所の心得である。だからその場合には決してお題目が本佛を捲き込んでしまふといふやうなことはない、これは本佛と我等の間を繋ぐ所の力である。斯ういふ風に考へれば、この方が判りも宜いし又間違ひが起らないのである。壽量品に依れば醫者と藥と病人になつ

て居る、薬の中からお醫者様が出て来るといふ事はない、醫者があつて搗き糺ひ和合して良薬を拵へて病人に飲ませる、即ちいろ／＼に法を説き給ひしものである。斯ういふ風に壽量品とか本尊鈔にある一番大事な所を能く記憶してさうして、あとのゴチャ／＼した事と混線しないやうにしなければならぬ。そこで然らばこの『本尊問答鈔』に書かれて居るやうな事は間違ひかという、間違ひではない、それは傍系教義といつて他の方を打つが爲めに起る所のものである。淨土宗に對しては、向ふが「稱名念佛」といふから、こつちは「唱題成佛」といふことになつて、南無妙法蓮華經と唱へさへすれば宜いといふ事になる。さうすると併し本尊といふものは無くなつて、風來のものになつてしまふ、唱へ言葉だけ與へられて居るので、信心する所の本尊といふものは判らぬ。そこで南無妙法蓮華經と言ひながら風來題目で、鬼子母神でも帝釋でも何でも構はぬといふ信仰になつて来る。丁度女が「亭主を持て」と言はれたゞけで、その亭主は極つて居ないといふことになるから、誰でも手當り次第に、丁度婢賣婦見やうな事になつてしまふ。さういふ風に行き當りバツタリの萬有神教的の題目と、絶對無上の本佛を戴いて統一神行的に行つて居る題目とは、唱へ言葉は一つでも非常に異なるのである。それは丁度大王の御妃になつて居る女と、婢賣婦のやうな女とは、同じ女と言つても價值が非常に違ふぢやないか、その相違を明かにしなければ、今後法華經といふものは世界に廣宣流布しない。これは本多日生がこの講壇に於て多年絶叫して居る所である。自分は或る時期を以つて死ぬけれども、この言論は永久に死な

ない。今のガラクタ坊主などが幾ら何といつても、この法華經の主義を法華經の壽量品の正義に依つて正し、絶對の本佛を根本に説いて、南無妙法蓮華經を救ひの綱とし、良薬とし、母の乳房として、本佛と我等の信仰とを繋ぐ意味に於て、假にも題目を唱へたならば本佛を意識せしめて、大慈大悲のお釋迦様を憶念して南無妙法蓮華經を唱へるといふことに解釋をせぬ限りには、法華宗といふものは支離滅裂のものになつてしまふ。それは教義を誤魔化さうと思へば、佛敎は廣いものだから、いろ／＼の話は幾らでも出来る『お前さういつても斯ういふ事もあるぢやないかといふやうなことで、誤魔化さうと思へば幾らでも混亂に導くことは出来る、けれども正義を唱へて將來この法華經を發揚しやうといふことになれば、そんな末の所に引か／＼つてはいかぬ、一番善い所を發揮しなければならぬ。今日目前の利害のみでなくして、永遠の廣宣流布の大願から考へて、法華經を世界的に發揚しやうといふことを考へるだけの坊さんが居らぬとするならば、碌な坊主が今日は居らぬと言つて宜いのである。眼識の足らない者ばかりがマゴ／＼して、切抜法門と言つて、御妙判の一節一句に拘泥してやつて居る。日蓮聖人の言はれた事が一から十まで悉く善いといふやうに考へて居るのは馬鹿漢である、佛敎と釋尊の説かれた中に權實本迹すべてを正して一番善い所に依つて佛敎を見なければ駄目ぢやといふのが日蓮聖人の議論である。日蓮聖人の御遺文もいろ／＼對手に依つて書いて居られる、それをゴツチャにして「何處でも構はぬ」といふやうな雜然たる頭を以つて見れば、何もかも判らなくなつてしまふ。だから此處が生

粹の一番善い所である、最高の教義は此處にあるといふ所を發揮しなければならぬ、その意味に於て私はどうしても釋尊を想ひ起して、お題目を唱へる事に、法華宗の信仰はならなければならぬと考へて居る。この『本尊問答鈔』の議論は、私共は専門學の上に於ては十分正して居る譯であるけれども今は一般的話であるから唯々それだけの事を申すに止めて置きます。

### 大田殿女房御返事

#### 十宗御書

これには孰れも別に御紹介する所がない。

### 四條金吾殿御返事

これは前にあつた四條金吾に領分が戻つて來たことに就いて、尙ほ詳しく仰しやつて居るので、如何にも有難い所である。

かの處は殿岡の三倍とあそばして候上、佐渡の國の者にこれに候がよくよく其處を知りて候が申し候は、三箇郷が内にいかだと申すは第一の處なり、田島は少く候へども徳は量りなしと申し候ぞ。二所は御年貢千貫、一所は三百貫と云ふ、かゝる處なりと承はる、何となくとも同隸といひ、親しき人人と申し捨てはてられて笑ひ悦びつるに、殿岡に劣りて候處なりとも、御下し文は

給たく候ひつるぞかし、まして三倍の處也と候、いかに悪くとも悪き由、人にも又上へも申させ給ふべからず候、良き處良きところと申し給はば、又重ねて給はらせ給ふべし。惡き處徳分無しなむと候はど、天にも人にも捨てられ給ひ候はむずるに候ぞ、御心得あるべし。(箱樹遺文錄)

即ち今度は領分が三倍になつて戻つて來たといふ譯である、こんな嬉しいことはない、朋輩に對しても、金吾はとうとう法華經を信するが爲に領分を奪られて、身の置き所もなくなつたと笑はれて居つた譯であるから、少しの處でも戻つて來れば嬉しい譯であるが、それが三倍にもなつて戻つて來たといふことは、如何に嬉しいことであらうか。さうしてその次にもやはりこの意味から仰しやつて居る。

こう申せば今生の慾とおぼすか、それも凡夫にて候へばさも候ふべき上、欲をも離れずして佛になり候ひける道の候ひけるぞ。普賢經に法華經の肝心を説きて候、煩惱を斷せず五欲を離れず等云云

(箱樹遺文錄)  
(一八一—二)

領分が三倍になつたといふことは嬉しい、その嬉しいといふのは自分の慾からいふのではないかといへば、それは慾からでも嬉しいといふ。それが日蓮聖人の面白い所である、その慾をも離れずして佛になることの出来るのが法華經の教である。それならば慾ばかりかいて居つたら宜いかといふと、曩には領分を捨てても乞食になつても正義を守れといはれた通り、時と場合に依れば正義の爲には一切の慾望を擲つてもしなければならぬ。けれども、それが無事に解決がついて、主人の方が信仰に入つて法華經

を信心するやうになり、金吾は忠義な者だといつて領分を下さるやうになれば、それは幾許貰つても宜い譯であるから、洵に有難い事でございますとお禮を言ひ居れば、又下さるかも知れんと書いてある。何ぼでも貰へ、それは法華經の爲めに悦ぶばかりではない、怒の方からでも悦べといふことが實に痛快なる所である。

日蓮聖人の御書といふものを下手に學ぶと、今のやうな所を見て切抜法門をやると『法華宗は怒張りて宜いのぢや』と斯ういふ事になるけれども、前には領分を捨て、乞食になつてもといふ、この鞏固なる正義の教があつて、それを實行して、今度領分が戻つて來るのであるから、その關係を能く觀なければいかん。御遺文といふものはやはり前後相照してその關係を見ないといふと、唯だ正義の一點張で、乞食になつても乞食になつてもといふと『法華宗は乞食になる宗旨ぢや……』左様なことではいかぬ、其處は洵に大事な所である。私共はこの兩方を併せ觀て、日蓮聖人の御教訓が如何にも有難い唯だ法華宗の者ばかりではない、これは日本人の永遠の教として斯うあるべき事ぢやと信じて居るのであります。

# 日蓮宗概觀 (其八)

故 梶 木 顯 正

## (二) 日蓮宗宗義篇

### 第一章 依 經

この項に就ては、序言として最初に大體を述べたからこゝでは省くこととする。

### 第二章 宗 名

#### (一) 立 名

名は實に大切なものであつて、古人も『名は身に至るの徳あり』と言ひ、又『名は體を顯はす』と言

つて居る位である。それを只徒に丑の年に生れたから丑之助、午の年だから馬五郎だなどと輕々しくやる事は少々考へねばならぬ事である。そこで此の宗の名を稱する事は餘程大切な問題であつて、本宗に内面的に考へて來ると、釋迦如來の説かれた一切經の心髓を提げて起つた宗旨であるから『佛立宗』なりと云はねばならぬ事になる。一體宗とか宗旨とか云ふことは何う云ふ意義を持つて居るかと言ふに、古來より宗とは『主なり、尊なり、獨尊の義なり』と言つて『一番尊いもの』と云ふことに説かれてゐる。日蓮聖人はその意味から吾が宗を呼んで『初心



成佛抄」の中に

問テ云ク八宗十宗ノ中ニ何レガ釋迦佛ノ立テ給ヘ  
ル宗ナル耶、答テ云ク法華宗ハ釋迦所立ノ宗ナリ  
其ノ故ハ已説今説當説ノ中ニハ法華經第一ナリ、  
故ニ法華經ヲ佛立宗ト云ヒ、又ハ法華宗ト云フ  
又天台宗トモ云フナリ。故ニ傳教大師ノ釋ニ云ク  
天台所釋ノ法華宗ハ釋迦世尊所立之宗ト云ヘリ、  
法華ヨリ外ノ經ニハ全ク已今當ノ文ナキナリ、已  
説トハ法華ヨリ已前ノ四十餘年ノ諸經ヲ云フ、今  
説トハ無量義經ヲ云フ、當説トハ涅槃經ヲ云フ、  
此ノ三説ノ外ニ法華經ヲ成佛スル宗ナリト佛定  
メ給ヘリ。餘宗ハ佛涅槃シ給ヒテ後或ハ菩薩或ハ  
人師達ノ建立スル宗ナリ、佛ノ御定ヲ背キテ菩薩  
人師ノ立テタル宗ヲ用ユベキ歟、菩薩人師ノ語ヲ  
背キテ佛ノ立テ給ヘル宗ヲ用ユベキ歟。

と、仰せられて居る如く、佛に付けて言へば釋迦  
佛宗、法に付けて云へば法華宗、人に付けて稱へれ

第一ナリ。釋迦世尊宗ヲ立ツルノ言法華ヲ極トナ  
ス、金口ノ校量深ク信受スベシ。

と記るされて居る。故に「日蓮宗」とは「日蓮聖  
人に依つて開かれた宗旨」と云ふ人に名けた外面的  
の名である。而も此の名は明治初年頃の教部省の付  
達などには「諸法華宗」と有つて「日蓮宗」とは無  
いのであるから最近の名である事が知れる。されば  
以前は皆「法華宗」と呼んで居たのであるが、維新  
後日蓮聖人の主義人格が廣く世間に認められて來た  
に就いて「日蓮宗」と云ふに至つたのである。

第二章 判 釋

裁判とも云ふ、委しく言へば「教相判釋」と言ふ  
ので、教法の理義を調査明白にする「調べ方」であ  
る。そこで物を調べハカルには必ずハカリとかモノ  
ナシとか云ふ一定の標準法則が無ければならぬが、  
特に法華經を弘むるには此の教相判釋に依らねば

ば日蓮宗であると言へる。(大體宗旨の名は、人に付けて云  
であ)亦聖人は同抄に

宗宗各別ニ我經コソスグレタレ餘經ハ劣レリト云  
ヒテ、我宗ヨシト云フ事ハ唯是レ人師ノ言ニテ佛  
説ニアラズ、已今當ノ三説ノ中ニ佛ニナル道ハ法  
華經ニ及ブ經ナシト云フ事ハ正シキ佛ノ金言也  
と、又同抄ニ

「經ニ云ク法ニ依テ人ニ依ラザレ、義ニ依テ語ニ  
依ラザレ、知ニ依テ識ニ依ラザレ、了義經ニ依テ  
不了義經ニ依ラザレ」文此ノ心ハ菩薩人師ノ言ニ  
ハ依ルベカラズ、佛ノ御定ヲ用ヒヨト云フ文也。  
と云はれて全く釋迦如來の金言に従つて宗旨を建  
てた事を明されてゐる。法師品の中には  
藥王今汝ニ告グ、我が所説ノ諸經ノ中ニ於テ法華  
最モ第一ナリ

とあり、又傳教大師は秀句の中に  
當ニ知ルベシ、新ノ法華經ハ諸經ノ中ニ最モコレ

ならぬ事を(餘教を弘めるには判釋はいらぬが)日蓮聖人は顯  
誘法抄に

夫レ佛法を弘通シ群生ヲ利益セント思ハン者ハ必  
ズ先ツ五義ヲ辨ヘテ正法ヲ弘ムベシ、五義トハ一  
ニハ教、二ニハ機、三ニハ時、四ニハ國、五ニハ  
佛法流布ノ前後ナリ

と仰せられて居る。又涅槃經には「時ヲ知ルヲ大  
法師ト云フ」と如來は示し給ふた。彼の眞言にして  
も淨土宗にしても又キリスト教邊にしても、他の宗  
教では教と機(機は機根とか機類とか云つ)の二ツの關係し  
か見てゐないからして、何時其の宗教が時代に合ふ  
とか、合はぬとか、或は國體に添ふとか、添はぬと  
か云ふ事で問題が起るのである。處が日蓮聖人は其  
の宗教撰擇の批判基準に「五義即ち五綱判(五知判と  
も云ふ)を立てられて、宗教傳道者は必ず之れに準據  
すべき事を讒告された。この教法と人類の機根の二  
ツの他に「時・國・及教法流布の前後」の三ツを立

てられたことは實に聖人の一大卓見である。如何なる時代に於ても此の教と國と時代の風潮を觀察して是等と如何に接觸し調和して行くべきかを見る事は最も宗教上重要な問題で、この點は日蓮宗獨特の點であつて、如何に聖人の抱負が雄大にして其の識見の高きかを窺ふに足る次第である。聖人は斷じて僅かな信者を集めて小さな教團を作らんとした人ではない、もつと堂々たる理想抱負のもとに健全なる文明を築き上げて、日本國からやがては世界の平和に迄で貢獻せんとした方である。天台も傳教も同じく法華經を弘通められたけれ共、やはり此の時・處・位に鑑みて述本本裏（期ち三つの故を以て三つとは一は時至故に、三は機類に非ざるが故に、と）の弘通と云つて、純粹の法華經を説かず法華經に他の經を混ぜ或は同じ法華經でも、（法華經二十八品を二つに分けて前の十四品を述門哲學方面を説き後の本門）と云ひ、後の十四品を本門と云ふ、述門は宗教の哲學方面を説いたもの。其の法華經教義の哲學を説いた方を表として（本門の純粹宗教を以て）弘められた、それは上

に擧ぐる三つの故に據られたが故である。

(一) 五綱判

日蓮宗が一代佛敎の勝劣淺深を見分ける方法は先づ此の五綱判である。其名目を擧げれば上にも明す如く、

- 一、教
- 二、機
- 三、時
- 四、國
- 五、序（又の名を教法法）

の五つである。この五つの公明正大なる審査選擇法に依つて選出されたものが即ち「宗旨の三秘」である、宗旨の三秘とは

- 本門の本尊
- 本門の題目
- 本門の戒壇

これを三大秘法（略して三）と云ふ。先づ順序として

五綱判から説くことゝしやう。

教とは釋迦如來の説かれた一切經即ち五千〇四十八卷の全部を指して云ふのである。如來は此の中に哲學の方面、宗教の方面、道德の方面と云ふ譯で至れり盡せりに説き明されて居る。キリストが偉いのマホメットが偉いのと云つても、人生の全面に亘つて教として説き切つた方は釋尊を指して他に無いのである。

先づ教の廣大なる點に至つては世界第一であらう。抑も「教」の意義を云ふならば

聖人下ニ被ムラシムルノ語

と云つて、如來が衆生を救ふ爲に説かれた一代佛敎を云ふのであるが、一口に唯だ教と言つても何しろ斯の如く多數あるのであるから、其の教の内容を能く審議調査して比較し研究した結果、如來出世の本懐衆生救済の正意を究めて誤りの無い教を弘めなければならぬ。方便品に「若シ小乗ヲ以テ化スル

コト乃至一人ニ於テモセバ我レ則チ慳貪ニ墮セン、此ノ事ハサダメテ不可ナリ」とある、如來は大小權實偏圓本迹と一代の間に様々なる教を説かれたが、御本意としては皆一様に實大乘本門の教を以つて衆生を救済し玉はんとしたのである。故に日蓮聖人は此の如來の御本意に選擇の根據を置いて、諸經の内容實質を批判し勝劣淺深を論明されたものである。然も聖人は教機時國抄に「法華經ハ一切經之中ノ第一ノ經王ナリト知ルハ是レ教ヲ知ル者也ト」稱し王へり。

機とは機類とか機縁とか云つて衆生の根性氣質或は性質の善惡、根性の利鈍を見極める、即ち相手の心なり姿なりをハツキリ知る事に名けて云ふ語である。今宗教を選ぶに當つて肝心の相手があるか無いか、大病人が風邪引か、を好く見て始めて與へる藥を定めると同じで、之れ又非常に大事なことである。

時—時代及人類の傾向といふものは終始變つて行くものである、故に日蓮聖人は「千經萬論を修學するとも時機相違すれば詮なし」と云はれ又「教は一なれ共時に從つて、持つ法は色々なるべし」と言つて尤も聖人は機よりも時を重く見て居らるゝのである之れを教機時國抄に

佛出世シ玉フテ必ず法華經ヲ説ント欲スルニ、縦ヒ機有レ共時無ガ故ニ四十餘年此經ヲ説キ給ハズト仰せられ、又「權經念佛等ノ時歟、法華經ノ時歟、能ク時刻ヲ勘フ可キ也」と、時に對する認識をハツキリせよと誡め玉へり。

國—教を弘めるには先づ國に合ふか合はぬかを見て弘めねばならぬ、と云ふのが日蓮聖人の考へである聖人は立正安國論に示めされたが如く、國と教との關係は尤も大事な事で、國の盛衰興亡は懸つて教の善惡邪正に有り、と云ふのが聖人の教觀であり、國家觀である。故に聖人は

方、東方ノ日本國ハ丑寅ノ方也、天然ニ於テ東北ニ縁有リトハ登ニ日本國ニ非ズ哉  
と、實に聖人の主張信仰は斯の如く三世を徹見せる根據より樹てられた大識見に發して居るのである。

序—とは「教法流布の前後」と云ふ事で、平たく言へば何んな酒の好きな人でも腹一パイ御飯を喰つた直ぐ後で、上等の酒だからと云つて吞まされても一向それは甘くない、と同じやうに充分前後の順序關係等を考察して懸らないと、返つて効果を擧ぐる所ではなくして法に傷をつけ人を損ずる事となる場合が有る事を諷め玉ふたのである。即ち序とは「過去の歴史を見て更に現在及將來を啓導すべき教法を弘むべし」との謂ひである。されば若し其時代が小乘・權大乘等の思想信仰に依つて、世法佛法共に大義を滅するが如き時代なりとするならば、如何なる困難迫害に出會ふとも敢然として究竟の實大乘を

法ハ體ナリ世間ハ影ナリ、體曲レバ影斜メナリと言つて居られる。日本の如き「天業ヲ恢弘シ天下ヲ光宅スル」肇國の大理想を有する國家に於ては特にこの點に留意して宗教を撰ばねばならない、聖人は「日本國は八萬の國にも勝れたり」と言はるゝが如く、我が國柄に對する充分なる認識信念が有つて其の上に「我が國は一向大乘法華經の弘る可き國なり、小乘の弘るべき國に非ず」と云はれ、亦我が肇國の理想と法華經の使命とは全く一なる事を看破して法國冥合を絶叫し玉ふたのである。されば曾谷入道抄に聖人は翻經の記を引かれて

翻經ノ記ニ云ク、大師須梨耶蘇摩左ノ手ニ法華經ヲ持チ右ノ手ニ鳩摩羅什ノ頂キテ摩テ授與シテ云ク、佛日西ニ入テ遺羅將ニ東ニ及ントス、此經典東北ニ縁有リ汝慎ンテ傳弘セヨト云予(日蓮)此ノ記文ヲ拜見シテ兩眼滿ノ如ク一身悦ヲ偏クス、此經典東北ニ縁有リ云。西天ノ月支國ハ未申ノ

弘むべきである。實大乘の弘まれる後には小乘權大乘何がせん、何ぞ瓦を取つて金銀珠玉を捨つる者あらんや。故に聖人は仰せられた。

已上此ノ五義ヲ知テ佛法ヲ弘メバ日本國ノ國師トモナルベキ歟  
と、又  
日本國ノ當世ハ如來ノ滅後二千二百一十餘年、後五百歲ニ當テ妙法蓮華經廣宣流布ノ時刻也、是レ時ヲ知レル也(時國抄)と。  
(次續)



# 開目鈔講話

(第九講)

小林一郎

小品般若經に云く、諸の天子、今未だ三菩提の心を發さざる者は當に發すべし。若し聲聞の正位に入らば、是人能く三菩提心を發さざるなり。何を以ての故に、生死の爲に障隔を作すが故に等云云。

小品般若經といふ經の中に言ふのは「三菩提の心を發さざる者」三菩提といふのは正覺といふこととす。「三」といふのは三つといふ意味では無論ないので、たゞ印度の發言を表はしたただけで、譯せば正

覺、正しいさとりといふ意味であります。三菩提の心を發さないといふのは、佛様のやうな覺りを具へたいといふ心持を發さない者、斯ういふ意味であります。吾々が佛道の修行をして、お經を讀むとか、佛を禮拜するとか、いろ／＼な修行をするのは、結局はつまり正覺を得んが爲ナンです。自分が覺れば必ず人を教へることも出来るし、又口で教を説かないでも、本當に覺つた心持を有つて居る人の顔つきも、體つきも、手の動かし方も、足の動かし方も、皆周圍に善い感化を與へることが出来るのでありま

すから、結局は何の爲に信心すると云へば、三菩提を得る爲め、正覺を得る爲である、斯う言ふより仕方がない譯であります。それを自分を反省することを抛つて置いて、人の爲め世の爲と言つても、自分がどうもボンクラでは、少しも世の中の爲になる譯はない。三菩提を發す、正しい覺りを得よう、自分が明るい心持の者にならうといふことが根本であります。

だからそれをこの經の中にも言つて居りまして、「未だ三菩提の心を發さざる者は當に發すべし」それはモウ佛の大乗の教をだん／＼學んで行けば、結局自分を完成することが、世の中の爲でもあれば人の爲でもある。斯ういふ心持になる筈です。

ところが「若し聲聞の正位に入らば」世の中の煩ひを離れて、自分だけ清浄な生活をするといふことを以て足れりとする「正位に入る」それで以て澤山だと斯う思つてしまふといふと、三菩提の心を發す

ことが出来なくなる。自ら限るのでありますから「モウこれで澤山だ、世間の煩ひを受けなければそれで結構だ、世間の人間は皆俗物だ、あんな俗物の仲間入りをしたくないで、自分一人で世離れた生活をして居れば、それでモウ澤山だ」といふやうな心持になつてしまふと、三菩提の心を發することが出来ない本當の覺りを開くことが出来ないのであります。

何故さういふ事が出来ないかといふと「生死といふのは、屢々申すやうに世の中の變化といふ意味であります、その世の中の變化に對して「障隔を作す」隔てを附けてしまつて「あんなどうも變化の多い、間違ひの多い世の中は嫌やだ、自分達は周圍の變化に關係しない」斯う言つて、世間と自分との間に障隔を附けてしまふといふと、それで一切モウお終ひです。それで本當の覺りといふものは得られないといふことが般若經の中に言つてあるのであります。

文の心は、二乗は菩提心をおこさざれば我隨喜せし、諸天は菩提心をおこせば我隨喜せん。

二乗といふのは聲聞、緣覺でありますが、即ち小乗の教で以てそれで澤山だと思ふ者は、三菩提心を發さない「佛と同じやうな智慧を具へたい、一切衆生を救ふ力を具へたい」といふ心持を發さないからさういふ者に對しては、モウ自分達は有難いと思はない「諸天」天上界に居る者などは、佛の教を熱心に學んで菩提心を發す「佛のやうな慈悲の心持を以て一切の人に接しよう、自分も智慧を具へた者になり、又世の中の人をも同じ道に導いてやらう」といふ心持を發すのだから、さういふ者に對しては自分達は隨喜する。有難いと思つてそれを助ける力を具へようといふ意味のことを、般若經の中には言つてある。

首楞嚴經に云く、五逆罪の人、是首楞嚴三昧を聞いて阿耨菩提の心を發せば還つて作佛することを得。世尊漏盡の阿羅漢は猶破器の如く、永く是三昧を受くるに勸忍せず等云云。

それから首楞嚴經といふお經の中にも同じやうなことを言つてある。「首楞嚴」といふことは梵語であります、それを漢譯すると「一切事了」といつて一切の事が了るといふことです。一切の事が了るといふことは佛のやうな心持になることです。信心が途中で停頓してしまつたのでは一切は了らない、佛様と同じやうな智慧を具へよう、又佛様と同じやうな大きな慈悲心を具へるやうになりたいといふ、この精神が緩まなければ、一切事了、即ち修行がスツカリ完成するのであります、その一切事了といふことを説きましたのがこの首楞嚴經といふお經であ

ります。

「五逆罪」といつて、父を殺すとか、母を殺すとかいふやうな恐しい罪を犯した者でも、その「首楞嚴三昧」即ち一切事了、佛様と同じになりたいといふこの決心を促すところの教を聞いて、成程そんなものかと思つて「阿耨菩提の心を發せば」阿耨といふのは「無上」といふ意味で、菩提といふのは「智」といふ意味でありますから、つまり無上の智です。これは正覺といふことと同じ事であり、佛の覺り、佛の智慧を具へるやうになりたいといふさういふ心持を發して、一生懸命に修行しますと「作佛することを得」結局は佛の境界に近づくだらう。よく日本の俗語などにも「悪にも強ければ善にも強し」といふやうなことを言ひますが、兎に角一つの事を一生懸命にやる人は、右の方に向いても一生懸命にやる、それがヒョツとして左に向けばやはり左の方にまづ直ぐに行く人であり、だから親を殺すと

いふことは悪い事だらうけれども、そのくらゐに悪い方に徹底的に行く人は、一たび悪かつたと氣が附けば、今度善い方に又ズン／＼行くでせう。だから悪人が却て成佛するといふやうなことを屢々言はれて居るのであります、これは要するに心が専らである。一つの事に總ての力を打込んでやるといふ人は、悪い方に打込めば飛んでもない所に行くけれども、それが善い方に向けば又非常に善くなる。一番始末の悪いのは、善い事もしなければ悪い事もしないといふどつち附かずの人であります。

それでお經の中には「一闍提」といふことを能く言つてありますが、一闍提といふのはつまりそれナです。これは不信といふことで、不信といふのはどつちにも一生懸命にならない者、いゝ加減な料簡で「マア佛教は宜からうから、あなたはあやりなさ、私もその内閑があつたら……」と言ふやうな人であり、そんなその内閑があつたらといふや

うなことではやれるものではない。善い事もそんな一生懸命にならぬ、悪い事もそれ程ではないといふ煮を切らない態度で居る者は、一生涯経つても何にもならない。これが所謂不信といふことであります。悪い人間がナニモ結構な譯ではないけれども、悪い事に力を打込むくらゐの者は、一たび覺つたならば善い方にも力が打込めるでありませう。それだから五逆罪を犯すといふやうなそんな悪い者でも一たび悔いて目が覺めて來れば「阿耨菩提の心」この上も無い、佛と同じ智慧を具へたいといふ望みを起す。それでその方にズツと力を打込んで行けば「作佛することを得」佛の境界にも到達出来るだらう。

ところが一番困るのは「漏盡の阿羅漢」といつて一通りの迷ひの無いくらゐでモウ澤山だと思つて居るところの阿羅漢、即ち世の中を離れた生活をして居る者は、これは器が破れたやうなものであるから「永く是三昧」三昧といふのは佛に成りたいと思つて

熱心に修行する心持です、その心持を受くる事が出来ない。そこまで熱心が續かないのであるだらうといふことを首楞嚴經の中に言つてあるのであります。

淨名經に云く、其汝に施す者は福田と名けず。汝を供養せん者は三惡道に墮つ等云々。

淨名經といふのは維摩經のことでありまして、維摩といふことを漢譯すれば淨名といふ意味であります。このお經の文は強く言つたので「汝」といふのは、世間を離れて自分だけ清淨な施しをして居る者のことを言つて居る。さういふ者に施しをしてもその施しは何にもならない「福田と名けず」それで以て好い結果は來ない、福を生み出すことは出來ない。さういふやうな世間を離れた生活をして一人で喜んで居るやうな者に供養するといふことは、

それは罪だ、却つて罪になるから、その供養した結果として「三惡道」地獄・餓鬼・畜生といふやうな所に、後の世は墮ちるかも知れない。斯ういふことを言つてあるのであります。

文の心は迦葉・舍利弗等の聖僧を供養せん人天等は、必ず三惡道に墮べしとなり此等の聖僧は佛陀を除きたてまつりては人天の眼目、一切衆生の導師とこそおもひしに、幾許の人天大會の中に於て、かう度々仰せられしは本意なかりし事なり。只詮するところは、我御弟子を責ころさんとにや。

その意味を言へば、迦葉・舍利弗といふやうな人に供養しても、その迦葉とか舍利弗等の人が、大乘の修行をして、一切の人を救はうといふ心持を起さない間は、さういふ人に供養したつて、その人々

はたゞ清淨な行ひをして一人を導くするといふことだけやつて居るのでありますから、さういふ人に供養するところの人間界天上界の者は、地獄・餓鬼畜生道に墮ちるだらう。斯ういふ意味であります。だから何としても大乘の修行をして自分を善くすることが人の爲である、又人の爲に何かしようと思へば、自分を完全にしなければならぬといふ、この自他を共に完うする道を修行しなければ、これは本當のものではない。又さういふ道の修行をする者を助けるのでなければ、本當に佛道の世に弘まるお助けをするとは言へない。斯ういふ意味であります。その事をこゝに随分強く言つてあります。

「此等の聖僧」は迦葉や舍利弗といふやうな人は「佛陀を除きたてまつりては、人天の眼目、一切衆生の導師」佛様は別だけれども、佛以外に於ては、人間界の者、天上界の者の眼となつて、人々の心を明るくし、人々の行ひを立派にするその指導者であ

る。又一切衆生を教へ導く人である。斯う思つて居つたところが、大勢の人間界や天上界の者の居る中で以て、お釋迦様が斯うたび／＼仰せられた。たゞ自分を潔くするだけでは駄目だぞ、世間を離れて自分だけ清浄な行ひをして居つても何にもならぬぞと仰しやつて居るのだから、これは「本意なかりし事なり」折角修行した甲斐が無いのであつて、その人は随分残念に思つたらう。そこだけ考へると「只詮するところは我御弟子を責ころさんとにや」折角修行をして居つても、世の中を離れた修行をするのは役に立たぬと仰しやるならば、そのお弟子を責めるだけであつて、酷い目に遭はせることになる。そこでどうも當惑してしまふやうなことになるはしなにか。斯うも思はれる。

此外牛驢二乳、瓦器金器、螢火日光等の無量の譬を取て二乗を呵嘖せさせ給き。

その他牛驢二乳、瓦器金器、螢火日光等のいろいろな譬がある「牛驢二乳」といふのは、牛の乳と驢馬の乳と比べて見ると、兩方白くて似たやうなものである。けれどもその牛の乳をだん／＼煮詰めて行くと、所謂熟蘇といふものになつて、それに酒を加へれば大變美しい醍醐になるが、驢馬の乳をだん／＼煮詰めて居ると、水のやうに薄くなつてしまつて醍醐にならない。見た所は似て居るけれども、煮て見ると牛の乳と驢馬の乳とは違ふ。それと同じやうに、同じ佛道の修行をするのでも、自分一人で世の中の煩ひを離れようといふやうな人と、一切衆生を救はうといふやうな心持の人々と、修行の初めはチョツト似て居るけれども、結局は非常に違つて来る。片方は人の事ばかりではないといふことになり、片方は世の爲、人の爲に力を盡す大きなたらさが出來てその修行が續いて行けば佛様にも成れるのでありますから、修行の初めの様子は似て居るけれども、結

一言二言ならず、一日二日ならず、一月二月ならず、一年二年ならず、一經二經ならず、四十餘年が間、無量無邊の經經に、無量の大會の諸人に對して、一言もゆるし給ふ事もなくそしり給しかば、世尊の不安語なりと我もしる、人もしる、天もしる、地もしる。一人二人ならず百千萬人、三界の諸天・龍神・阿脩羅・五天・四洲・六欲・色・無色・十方世界より雲集せる人天・二乘・大菩薩等、皆これをしる。又皆これをきく。各各國國へ還りて、娑婆世界の釋尊の説法を、彼彼の國國にして一一にかたるに、十方無邊の世界の一切衆生一人もなく、迦葉・舍利弗等は永不成佛の者、供養してはあしかりぬべしとしりぬ。

局は違ふといふことを牛と驢馬の二つの乳に譬へたのである。

それから「瓦器金器」もその通りで、瓦で拵へた器に金箔か何かを塗り廻したのもでも、純粹の金で出來たものでも、チョツト見ると同じだが、磨いて見ると片方は金箔だから直ぐ割けてしまひ、片方は磨けば磨くほど艶が出るから、そこで違つて来る。人間もその通りであつて、本當に眞實のものを求めて行く人であれば、どこ迄も進歩するけれども、目の前だけの事を考へて居たのでは、途中でその進歩が止まつてしまつて何にもならない。斯ういふ事を言つてあるのであります。

それで前から幾度も申しますが、つまり大乘と小乗の區別といふものは、結局はそこで附けるのです。大乘といふのは佛と同じにならない間は安心すまいといふ心持、それが大乘心であります。小乗心といふのは、そんな偉い事をしないで、加減で

宜いぢやないかといふ心持が小乗心です。大乘と小乗の區別に就てはいろ／＼な説明がありませうけれども、結局はそれです。佛と一致するまでは努力を止めまいといふこの心持さへあれば、それは確に大乘と言ふことが出来る譯です。今言ふやうに、金箔を附けたのでは磨くと剝けてしまふ。本當の金ならどこ迄磨いても剝けないのでありますから、佛と一致しよう、佛の境界にまで行かうといふこの決心さへ据つて居れば、どんな難が來ても、どんな迫害に遭つても、そんなことで負けるものではない。これが本當の大乘心であります。併しいゝ加減な所でモウ澤山だといふやうな心持を起せば、それは縦ひ法華經を讀んで居ようが、何經を讀んで居ようが、結局、小乗の仲間になつてしまふ譯であつて、そこは餘程しつかりしなければならぬ譯であります。それを瓦器と金器とに譬へたのであります。或は螢の火と日の光とに譬へて、自分一人の迷ひ

を除く者の心持は螢火のやうな微かなものである。一切衆生を救ふだけの力を具へたいといふ心持を有つた者は日光の如きものであるといふやうな、さまざまな譬が大乘の經典の中に説かれてありまして、さうして二乗即ち小乗の教を習つて自ら満足する者をお責めになつて、それだけはいけないといふことを言つてある。それは一言二言だけではない、一日二日だけではない、一月二月だけではない、一年二年だけではない、一つの經、二つの經ではない、四十餘年の間、澤山の經の中に於て澤山の人に對して一言も許すことなく、自分一人で満足する者はいけないぞといふことを仰しやつて居る。「ゆるし給はず」どうしても大慈悲を有たない者は駄目だ、自分一人、清淨な行ひをしてもそれではいけないといふことを、繰返し／＼お責めになつて居る。

子を養成して置いて、その大勢の惡口を言つてそれで終ひだといふことでは、何の爲に教を説かれたか判らなくなる。そこで法華經といふものが出て來てさういふ小乗の教を習つた者でも、モウ一步進んで大乘の教を學んで、大慈悲の心持を起せば、今までの修行は決して無駄にはならないぞといふことを言はれる。そこで初めて四十餘年の教といふものが活きて來る譯で、その事をこれからだん／＼述べて行かうといふのであります。

それだのにお釋迦様が自分のお弟子を責めて、お前達の修行は駄目だぞと言はれることは、これは教の途中であります。その途中だけ聞いて、十方の世界の者が、又各々自分の國へ還つて、さうして娑婆世界のお釋迦様が、自分の弟子が永い間修行したけれども、その修行したのは駄目だと仰しやつたといふことを、自分達の國に於て大勢の人に語つたならば、その十方の澤山の世界の人間といふものは皆がツカリしてしまつて「ア、さうか、舍利弗も迦葉も駄目かナ、あゝいふ者も永く佛に成らないのかナ、して見ればどうも佛道の修行をしたところが當にならぬものだナ」と思ふだらう。

若しそれで終つてしまへば、どうもお釋迦様の仰しやることは意味が無くなるが、併し佛様といふものは『不妄語』で出鱈目な事を仰しやるのではないといふことは、我も知る、人も皆知つて居る。天上世界の者も知つて居れば、地面の上に居る者も知つて居る。一人二人ならず、百千萬人、三界の諸天・龍神・阿修羅・五天・四洲・六欲・色・無色、これは有ゆる世の中の生命の有る者の世界であります

その大勢の者が皆知つて居る。又十方の世界から集つて來たところの人間でも天上界の者でも、聲聞や緣覺でも、菩薩でも、誰でも、みなお釋迦様の仰しやる事は妄語ではない、出鱈目ではないといふことは知つて居る。



ところが後になつて八年の法華經をお説きになつた時に、それをスツカリひつくり返して、今まで小乗の教を學んだ者でも、モウ一層奮發して、菩薩の行を積みさへすれば、今までの努力は無駄にはならないぞといふことを仰しやつたから、茲に至つて初めて『成程これは佛のお弟子になつて修行した甲斐が有る』といふことが、本當に解つたといふことを次に言つて居るのであります。

而を後八年の法華經に忽に悔還して、二乗作佛すべしと佛陀とかせ給はんに、人天大會信仰をなすべしや。用ゆべからざる上、先後の經々に疑網をなし、五十餘年の説教皆虚妄の説となりなん。されば四十餘年未顯眞實等の經文は荒量か、天魔の佛陀と現じて後八年の經をばとかせ給かと疑網するところに、實にげにしげに

さうして却て『先後の經々に疑網をなし』どうも佛様の仰しやる事がいろ／＼なものだから、仰しやる事がてんで解らないといふので、先後の經に對して疑ひをなし、五十餘年の説教といふものが結局何が何だか解らぬことになつてしまふかも知れぬ。そこで『四十餘年未顯眞實』といふことが無量義經の中にあつて、今まで四十何年の間まだ眞實の事を仰しやらないと言ふけれども『荒量』といふのは極く大ざつばな話で、あまり當にならないやうにも思はれる。それは天魔が佛と成つて現れて、さうして後八年の法華經をお説きになつたのではないか知らんと疑ふだらう。

ところが『實にげにしげに』本當に皆が成程と納得するやうな様子で、二乗即ち小乗の修行をした者も、後には佛に成ると言つて、その佛に成る時代の名前、又その佛に成つて住むところの國の名前なども、法華經の中には一々説いてあります。さ

劫國名號と申て、二乗成佛の國をさだめせ給へば、教主釋尊の御話すてに二言になりぬ。自語相違と申はこれなり。外道が佛陀を大妄語の者と喚しことこれなり。

而るに後八年の法華經の中に於て『忽に悔還して』——悔還してといふのは、前のは眞當ではないといふことを仰しやつて『二乗作佛すべし』と説かれた。だからこれはどうも能く考へて見ないと、そこだけ聞いたのでは『人天の大會信仰をなすべしや』皆どうも當にならないと思ふだらう。前に仰しやつた事と後で仰しやつた事と違ふのだから、どつちを當にしたならば宜いか判らぬと思ふだらう『用ふべからず』どうも折角佛様が仰しやつた事だけれども當にならないと思ふかも知れない。

うして『二乗成佛』即ち聲聞や緣覺が佛に成つた後の落着く所もハツキリと定め、又時代の様子なども記されて、又佛に成つた後にどれ程大勢の弟子を感化するかといふ、その感化するところの弟子の數なども定められる。だからお釋迦様の仰しやる事が二言になる。二いろだ。前には聲聞や緣覺の修行をする者は見込が無いと仰しやつて置いて、今度法華經になつて、イヤ聲聞や緣覺の修行をした者でも、モウ一步進めば役に立つと、斯う仰しやるのでありますから、このお釋迦様の仰しやつた事が二いろになつてしまふ『自語相違と申はこれなり』又外道がお釋迦様のことを『大妄語』嘘つきだと言つたのも成程その所を考へれば尤である。

そこで方便と眞實の教の區別けを附けなければいかぬといふことになる。方便の教と眞實の教とは違ふ。方便の教の方では『小乗の修行は駄目だ』といふ。眞實の教、法華經の中には『小乗の教を學んで

も、モウ一步進めば今までの修行は皆役に立つぞ」  
 斯う言ふのでありますから、方便の教と眞實の教といふものは、何だか矛盾するやうに思ふのだけれども、本當はさうではないのであつて、小乗の修行は駄目だと言はれるのは、小乗の修行は駄目だから、モウ一步進んで大乘の修行をしろといふことを仰しやうたいから、言つて居るのであります。決して方便の教といふものは出鱈目ではない。チョツト見ると、さう見える。前に仰しやつた事と法華經の中に説かれた事と違ひますから、本當に考へないと、これは矛盾するやうに見えるだらうといふことを、日蓮上人が懇切にその事を言つて居るのですから、餘程考へないといけない。後で説いた事が眞實ナンだから、その眞實の教を信じて見れば、今までに假に仰しやつた事にも意味が有るといふことが解る。兩方同じに見て居ると、これとこれとどう違ふか、どつちが眞實か解らない。結局何も當にならぬといふ

ふことになるかも知れぬ。この事はしつかり考へなければいけないと言はれて居ります。

人天大會興さめてありし程に、爾時に東方寶淨世界の多寶如來、高さ五百由旬廣さ二百五十由旬の大七寶塔に乗じて、教主釋尊の人天大會に自語相違をせめられ、とのべ、かうのべ、さまざまに宣させ給しかども、不審猶はるべしともみへず、もてあつかひておはせし時、佛前に大地より涌現して虚空にのぼり給ふ。例せば暗夜に満月の東山より出るが如し。七寶の塔大虚にかゝらせ給て、大地にもつかず大虚にも付せ給はず、天中に懸て寶塔の中より梵音聲を出して證明して云く、爾時に寶塔の中より大音聲を出して

歎めて言く、善哉善哉釋迦牟尼世尊、能く平等大慧・教善薩法・佛所護念の妙法華經を以て大衆の爲に説きたまふ。是の如し是の如し。釋迦牟尼世尊所説の如きは皆是眞實なり等云云

それでありますから、皆極く淺薄に考へると、眞實の事かどうか判らないと思つて、皆「興さめて」迷つて呆れ果て、居る時に、東方の寶淨世界の多寶如來がそこに出現されたといふことが書いてある。高さ五百由旬、廣さ二百五十由旬の七寶を以て飾つた塔の内に入つて、教主釋尊の前に出て、お釋迦様の仰しやつた事が、自語相違で、前に仰しやつた事と後で法華經で仰しやつた事と違ふので、どつちが眞實か解らないで困つて居る所に、この多寶如來が大地から現れて来て、さうして虚空に昇つて、その七寶の塔の内に釋迦と多寶と並び坐して、さうして

多寶如來がお釋迦様の仰しやることは確に間違ひないといふことを大勢の前で證人にお立ちになりました。

ちやうど譬へて言へば、暗い晩に満月が東の山から出たやうなもので、その七寶の塔が虚空に懸つて地にもつかず、虚空にもつかず、天のまん中に在る。その塔の中から多寶如來が「梵音聲」と言つて、清淨な聲を出して證明して仰しやる。これは法華經の寶塔品の中の言葉でありますが、その時に寶塔の中より大音聲を出して歎めて仰しやるには「善哉善哉釋迦牟尼世尊能く平等大慧・教善薩法・佛所護念の妙法華經を以て大衆の爲に説きたまふ。是の如し是の如し。釋迦牟尼世尊所説の如きは皆是眞實なり」と斯う仰しやつたといふのであります。  
 この言葉は短い言葉でありますが、大乘の教の眞實の意味を能く明かして居る言葉であります。  
 平等大慧

教菩薩法  
佛所護念

この僅かの三つの句であります、この三つの句で大乘の教の特色を表はして居ります。その一つは「平等大慧」といふこと、これは一切の人の心の底を見透した智慧で説くといふことです。平等といふことは、目の前を見れば、馬鹿もあれば利口もあり、善人もあれば悪人もある、けれども佛様の眼から御覧になれば、智慧が有ると言つてもその智慧は多寡が知れたものである、善人だと言つてもその善は多寡が知れたものです、悪人だと言つても、その悪人もやはり佛に成る性質を有つて居るのだから、佛の眼から御覧になれば平等に見える。ちようど道を歩いて居る者が、五尺二寸の人と五尺八寸の人とは大分背が違ふけれども、三階の上から見下せば大概同じに見える。大して違はない、高所から見れば二寸や三寸の違ひは同じに見える。それと同じやうに吾

は能く心得て居なければならぬ譯でせう。それから「教菩薩法」である。佛の教は本當は菩薩の道を教へる、他の事は何も教へない。だから法華經の中に、別の所で「聲聞の弟子無し」とあります。聲聞即ち小乗の教を學んで、世の中を離れて、自分一人清淨な行ひをして、それで澤山だと思ふ者は、自分の弟子ではないのだ、弟子と認めない、聲聞の弟子は無い。自分の弟子はいつでも一人で宜いと思つてはいけない、佛様の心持を以て自分の心持として、一切の人を教はう、一切の人と共に助からうといふ、その大きな心持を有つて居る者でなければ佛の弟子とは言へない。それで「聲聞の弟子無し」と言つて居られるのであります。それが所謂「教菩薩法」といふことであります。大乘の經典といふものは皆菩薩の道を教へる、己れを完らし人を完うする道を教へる。自ら覺り他を覺らせる道を教へる。これが教菩薩法であります。

吾も互は往來で肩を並べて居る場合は「彼奴は利口だ、此奴は馬鹿だ」「彼奴は善人だ、此奴は悪人だ」と言ふけれども、佛様から御覧になれば、悪人でも善人でも大して違はない。智慧が有ると言つたつてその智慧は多寡が知れたものだ。さういふやうに考へて行くのがそれが平等大慧であります。佛様の立場から御覧になれば、悪人もその惡を改めれば佛に成れる、善人もその善で止つてしまつては駄目だ、モツと奮發しなければならぬ、結局同じことであります。善人でも悪人でも、智者でも愚者でも、奮發して佛の境界に到達しようといふ心持を起すか起さなかに依つて、その人の永い生命が決定されるのであります。現在の中で少しばかり物を知つて居つても、少しばかり善い行ひをしても、それだけを頼みとしたのでは逆も救はれないのであります。さういふ所をしつかりと見極めて居られるといふことが所謂平等大慧であります。これは教を世に弘める人

それから「佛所護念」佛様はいつでも護念して居らつしやる。護念といふのは、どうぞこの教が世の中に傳はれるやうに、どうぞこの教に依つて世の中が救はれるやうにといふことを、いつでも心に護念して居らつしやる。その教の一番絶頂とも言ふべきものが「妙法華經」法華經の教である、その法華經を以て大勢の爲にお釋迦様はお説きになるのだ。「是の如し是の如し」今お前達が聞いた通り、お釋迦様は非常な大悲の心持を以て教を説いて下されるその釋迦牟尼世尊の仰しやる事は皆眞實である。本當に佛の心に思ふ事を打明けてお説きになるのだ、といふ事を多寶如來が證明されたといふことが、法華經の寶塔品の中にあるのであります。

又云く、爾時に世尊、文殊師利等の無量百千萬億舊住娑婆世界の菩薩乃至人非人等の一切の衆の前に於て、大神力を現じ

たまふ。廣長舌を出して上梵世に至らしめ、一切の毛孔より、乃至、十方世界の衆の寶樹の下の師子の座の上の諸佛も、亦復是の如く、廣長舌を出し無量の光を放ちたまふ等云々。又云く、十方より來りたまへる諸の分身の佛をして、各本土に還らしむ。乃至、多寶佛の塔、還つて故の如くしたまふべし等云云。

それから又神力品を讀んで見ますと、その中に、爾の時に文殊師利等の澤山のこの娑婆世界に住んで居る菩薩達、人間界の者や人間界以外の大勢の前に於て神力を現はされた。舌を出して、その舌が梵天といつて天界のズツト遠くまで届いたといふことがある。これは前に申したやうに、舌を出すといふことは偽らないといふしるしであります。佛様が舌を出してその舌が天界まで届いたといふことは、

佛様が自分の言つた事は偽りの無い、千萬年に亘つて變らないものだといふことを表はされた。それから一切の毛孔から光が出たといふことが神力品にあるのでありますが、これも佛の智慧が一切の人の心に染み込んで、一切の人間が皆佛の境界に到達するやうな力を具へるやうになるといふことを表はして居るのであります。

それから又十方の世界のいろ／＼な樹の下の師子の座に居るところの佛様も、お釋迦様と同じやうに舌を出して、又身から無量の光を放つたといふことも言つてある。これはお釋迦様の仰しやる事は絶対の眞實のことであるのだから、その絶対に眞實だといふことを、有ゆる佛が證人に立つて世間の一切の人に知らせるといふ意味であります。

それから又その證明が終つて後に、十方から來たところのいろ／＼な佛様を各々本土に還らし、多寶佛塔も亦故の如くに納まるといふことがある。

これは前にも申した事でありますが、お釋迦様が教をお説きになる時に、多寶如來が出て、それが眞實だといふことの證人におなりになつたといふこの事實は、チョット考へると要らないことのやうであります。お釋迦様といふ立派な智慧を具へた方が出て、大勢に教をお説きになつたならば、モウそれで澤山な筈でありますのに、多寶如來といふ佛様が又別に出て來て、お釋迦様が仰しやつた事は眞實だといふ證人に立つといふことは、何だかお釋迦様の價值が下るやうなことで、チト變に思はれるのであります。併し佛教の根本の精神から言へば、いつても「理」と「智」と兩方から考へなければならぬといふことになりません。理といふのは絶対の眞實の事、智といふのはその眞實の事を本にして一切の人を救ふはたらきであります。だから理の方は根本を言ひ智の方はそのはたらきを言ふのでありまして、お釋迦様の御一代は智のはたらきであります。一切の人

間を皆救ふといふはたらきを八十年間なされたのであります。そのお釋迦様の一切の人を救ふといふはたらきは、これは眞實の事だ、永遠に變りはしないお釋迦様の教をお説きになつたのは五十年か六十年に過ぎないけれども、その五十年間にお説きになつた事は、絶対の眞實の事であつて、これは千年經たうが萬年經たうが、變るものではないといふことを表はす爲に、多寶如來といふ所謂理を代表した佛様が出て來て、證人に立つたといふのであります。

いつてもこの「理」と「智」と兩方考へなければならぬ。何が眞實かといふことを考へると共に、その眞實の事が解つたならば、それをはたらかして一切の人を救ふといふ智のはたらきをしなければならぬ。併しその眞實のはたらきは、何處か間違ひが少しでもあるといけないのでありますから、そこでこれは理に照して、さうして間違ひのないやうに明かにして行くといふことで、理は智を俟つて行はれ、

智は理を土臺として、たらしきをするのでありまして、理と智といふものはいつでも相俟つて居るものであります。

この事は、お釋迦様と多寶如來の二人の昔の事だと思つてはいがぬのであります。吾々もいつでもこれを考へなければならぬ、自分の考へて居る事が眞實か嘘かといふことをしつかり突止めなければならぬ。それと同時に自分の眞實だと思つて居る事が周囲の役に立つて居るか、世の中の役に立つて居るかどうかといふことも考へなければいけない。それから又ウツカリすると世の中の爲だと思つて居る事が間違ひになり易い事があるから、その時には理の方に戻つて考へなければならぬ。自分は世の中の爲だと思つてやつて居るけれども、これは本當に善い事か知らん、何處か間違ひがありはしないかといふことを理の方に照して又考へる。いつでも兩方からやらないといけない。どうかすると間違ひになり易い

大覺世尊初成道の時は、佛十方に現じて釋尊を慰諭し給ふ上、諸の大菩薩を遣しき。般若經の御時は、釋尊長舌を三千にをほひ、千佛十方に現じ給ふ。金光明經には四方に四佛現ぜり。阿彌陀經には六方の諸佛舌を三千にををう。大集經には十方の諸佛・菩薩、大寶坊にあつまれり。

例へばお釋迦様が初めてお覺りになつた時に、十方の佛様が現れて、さうしてお釋迦様を慰めて、ア能く御修行なされた、能くそれだけの事をなされたと申して、さうして又十方の世界から大菩薩を遣はして、お釋迦様をお慰め申したといふことを、これは華嚴經の中にある事柄をこゝに擧げたのであります。

それから般若經の中には、お釋迦様が舌を出してその舌が三千世界を覆うた、又十方に千の佛様が現

から、いつでも理に照して間違ひがないやうにする。併し眞實の事が解つてもどうかすると怠り易いから今度智の方に照して、眞實の事は出来るだけ實行しよう。出来るだけ世の爲め人の爲に力を盡さう、斯ういふ風に眞實の理を覺るといふ事と、これをはたらかせるといふ事と、この兩方面の缺けないやうに片手落ちにならないやうにすることが非常に必要である。だから經典にもそれが現れて居る、お釋迦様が一切の人を救ふ爲に教をお説きになるといふと、多寶如來が現れて、これは眞實だ、釋尊のお説きになる事は間違ひがないといふことを證據立てられる。斯ういふ事が説かれて居るのであります。

一體これは法華經の中に説かれて居る事だが、初めから言ふと、お釋迦様が覺りをお開きになつた時からそれに似た事柄はある。併し法華經の中にあるこれ程の事は前に無かつといふことを、これから後で申します。

れたといふこともある。それから金光明經の中にも、四方から四つの佛様が現れてお釋迦様の仰しやつた事は間違ひないといふ證人になつたといふこともある。又阿彌陀經の中にも六方の佛が出て、舌を出して、三千世界全體に、この佛様の教の眞實だといふことが證明されたといふ事もある。大集經の中にも十方の諸佛、諸菩薩が大寶坊といふ所に集つて佛の教は眞實だといふ證據になつたといふのであります。

是等を法華經に引合せてかんがうるに、黃石と黃金と、白雲と白山と、白水と銀鏡と、黒色と青色とをば、翳眼の者・眇目の者・一眼の者・邪眼の者はみたがへつべし。華嚴經には先後の經なければ佛語相違なし。なに、つけてか大疑いで來べき。大集經・大品經・金光明經・阿彌

陀經等は、諸の小乘經の二乗を彈呵せんが爲に十方に淨土をとき、凡夫・菩薩を欣慕せしめ、二乗をわづらはす。小乘經と諸大乘經と一分の相違あるゆへに、或は十方に佛現じ給ひ、或は十方より大菩薩をつかはし、或は十方世界にも此經をとくよしをしめし、或は十方より諸佛あつまり給ひ、或は釋尊舌を三千にをほひ、或は諸佛の舌をいだすよしをとかせ給ふ。此ひとへに諸の小乘經の十方世界唯一佛ととかせ給ひおもひをやぶるなるべし。法華經のごとくに、前後の諸大乘經と相違出來して、舍利弗等の諸の聲聞・大菩薩・人天等に、將非魔作佛とおもはれさせ給ふ大事にはあらず。

だから、この法華經の教が眞實だといふことを示す爲に有ゆる佛様が、どうしてもこれが眞實だ、これを信じなければならぬといふことを極力説かれた譯であります。

大集經とか大品經・金光明經・阿彌陀經といふやうなもの、これは小乘の經に比べて、小乘の經を信する者を、まだそれではならないぞと教へる爲に、十方に淨土を説いて、凡夫や菩薩をして佛を仰ぎ慕ふ心持を起させる。それから「二乗をわづらはす」といふのは、聲聞や緣覺で世の中の煩悩を避けたいぐらゐの者では足らぬぞといふことを仰しやつた。その中には小乘經と大乘經とは少し違ふからその違ひを現はす爲に十方の佛が世に出られて、大乘の經の尊いといふことを證明されたといふこともある。或は十方から大勢の菩薩を遣はされたとか、十方の世界にもこの大乗の教をお説きになるのが尊いといふことを皆に承認させるとか、十方よりいろ

今申したやうないろ／＼な經の中にはさういふ不思議な事があるけれども、法華經と比べて見ると黄い石と黄金ほど違ふ、白い雲と白い山ほど違ふ、白い水と銀の鏡くらゐ違ふ、黒い色と青い色ほど違ふ。これを眼の悪い者や一眼の者は見違へるだらうけれども、本當に完全な眼の有る者が見れば、見別けられる筈であります。それと同じやうにいろ／＼な經の中に現れた不思議な事と、法華經の中に現れた不思議な事とは全然類が違ふ。法華經こそは本當にお釋迦様が眞實のお心持を以てお説きになつたのだから、眞實であることを有ゆる佛様が世の中の人に知らさうといふので、いろ／＼不思議な事が出て居る。

華嚴經は一番初めに説かれたものだから、その後には比べるものが無いから、佛様の仰しやつた事が眞實だといふことをそんなに誰も疑ふ者は無かつたらう。ところが法華經は五十年の後に説かれたのいろな佛が集まられるとか、或は釋尊が舌を出して三千世界を覆うたとか、或は大勢の佛様が舌を出したといふやうな事があるが、それは要するに小乘の經典の、十方の世界に各々別の佛様があるといふことを打破るだけのものである。

ところが法華經になつて來ると、さういふ大乘と小乘との區別ではないのであつて、大乘の教の中に於て、今までのはまだ方便であつて、これから佛様が眞實のお心持をお説きになるといふことを言ふのだから、この法華經といふものは「前後の諸大乘經」大乘の經典の中に於て以前のものと今のものと違ふ斯ういふのであります。違ふと言つても違ひ方の程度が同じではない、これを明かにしなければならぬ。これはお經をいろ／＼比べて読んで見ると本當に解ることでありまして、どのお經でも「この經はつまらぬお經だ」と言つて居るお經は無い。そんな事を言つたら誰も信じはしません。今までのいろ／＼な

事を言つたけれども、これはつまり「事だヨ」と言つたら誰も信じないから、どの經典でも、その經典の中に於ては、この經で説く事がこれが眞實だ、これが一番だ、と斯う言つて居る。けれどもその一番だといふことは何に比べて言ふか、大乘の教を説いてこれが一番だと言ふ時には、小乗のよりは勝れて居る、斯ういふ意味であります。ところが法華經で以てこれが一番だと言ふ時には、たゞ小乗より勝れて居るといふことではない。大乘の教の中に於て今まで説いたよりそれ以上の事を説いて居るのだ、斯ういふ意味です。だから一番だといふその一番の程度が違ふ。

それをこゝに言つて居るのであります。どの經でも一番だと言ふのだから、どれが一番だか解らない。けれども比べて見れば解る。華嚴經を説かれたのはどういふ場合に説かれたか、金光明經を説かれたのはどういふ場合に説かれたかといふと、それはい

而を華嚴・法相・三論・眞言・念佛等の  
翳眼の輩、彼の經經と法華經とは同じ  
とうちおもへるは、つたなき眼なるべし。

それ程大事な佛様の眞實の心持を打明けられた教である。それを後になつては華嚴とか、法相とか、三論とか、眞言とか、念佛とかいふやうな宗を主張する人々が、自分の眼が眩んで居るものだから、それで他のお經と法華經とは同じやうなものだと思つて「法華經にもこれが一番善いとあるし、華嚴經にもこれが一番だとあるから、結局どれを信じても宜いぢやないか」といふやうな心持を有つて来る。これは經と經と比べ合せて徹底的に研究をするといふ用意が足らないからさうなつたのだ。斯う言はれるのであります。

ちようどこゝに名前が出て來ましたから一通り申して置きたいのであります。一體日蓮上人が他の

つても小乗の教と比べてこの方が眞實だといふ意味で説いてある。法華經は四十何年の説法の後に説かれたのだから、この法華經は、今まで説いた一切の中に於てこれが一番上だ、自分の本心を打明けたものだ、と斯う言はれるのである。だから法華經で説かれた事を信するより外ない。だん／＼説いて來て、一番終ひに「これが自分の本心を打明けたのだ」斯う言はれるのですから、これを信じないでモウ一つ前に説かれた經に、この經が一番だとあるからそれでも宜からうといふやうなことで、これは佛様の眞實の心持を知つたといふ譯にはならないのであります。

ところが法華經を説いた時に、いろ／＼な大乘經と違ふ事を言はれるものだから、舍利弗その他の大勢の者は、佛様が何だか譯の解らぬ事を仰しやるから、惡魔が佛になつて現れて吾々を困らせるのではないかとさへ思つたといふのであります。

宗の攻撃をなさる。所謂「眞言亡國」とか「禪天魔」とかといふことを仰しやるのであります。その根本の精神を能く辨へないといふと何だか日蓮といふ人は、自分の宗旨を弘める爲に他の宗の惡口を言つて居るのではないかといふやうに思ふのでありますけれども、そこは能く辨へて置かなければならぬのであつて、日蓮上人は決して他の宗を排斥しようとしたのではないのであります。實を云ふと彼の宗が法華經を排斥して居る。だから法華經を弘める爲に他の間違ひを直さなければならぬ。斯ういふことになつて居る。だから日蓮上人の戰は、攻めて行く戰ではない、防ぐ方の戰、防禦的の戰であります。そこを間違へて、何だか日蓮といふ人は、新しく宗旨を立てる爲にたゞ無暗に他の惡口を言つて居るのではないか、斯う思ふのは、それは飛んでもないことではあります。

それで日本にいろ／＼な宗旨が渡りましたけれど

も、奈良朝の末までに六つの宗旨が渡り、平安朝になつて眞言と天台が渡つて八つになり、武家の時代になつて禪と念佛が弘まりまして十になつて、日蓮上人當時に於ては、その十の宗旨が日本に弘まつて居つた譯であります。併ながらその十の宗旨の中に教義だけは誰か研究して居るけれども、實際の信仰の力をあまり有たないものもあつた。その十宗の中で實際宗教として世の中に勢力を有つて居るものは

念佛

禪

眞言

律

の四つだけであります。「念佛」は所謂淨土宗でその時分にはまだ親鸞上人の淨土眞宗といふものは全く勢力の無いものでありましたから、その當時の念佛といふのは法然上人の創めた淨土宗でありま

す。それから「禪」は曹洞の禪も臨済の禪もありま

いのだといふので、念佛の方では法華經を敬して遠ざける。決して惡口は言はない、結構だが、どうも法華經は今の時代に合はない。斯う言つて法華經を排斥するのであります。

それから禪は無論「不立文字」と言つて經典の文字で書いて居る事などは眞實ではない、眞實の事は佛様のお心持が自分の心にちかに通つて來るのだといふ譯で、經典を排斥するから、無論法華經を排斥する。

それから眞言は、これは大日如來を説くのだからお釋迦様といふものは大日如來が假にこの世に身を現したに過ぎない。だから法華經はお釋迦様の説いた教でつまらぬものであつて、本當の本佛のお説きになつた教といふものが大日經だといふ建前であり

ますから、法華經を排斥する。  
律は、世が末になつて來ると難かしい理窟を言ふよりは、佛の戒律を守つた方が宜かろう。殺すな

すが、兎に角武家の間に傳へられた。それから「眞言」はこれはずつと昔から傳つて居りまして、あの時代に於ても相當な勢力を持つて居つた。それから「律」といふのは一時頽れましたけれども、鎌倉の極樂寺に居りました良觀といふ人がこの律を復興致しまして、これが又世に流行つて來た。それで日蓮上人當時に於ては、活きた宗教と申しますれば、念佛と禪と眞言と律の四つであります。

ところがこの四つは皆法華經を排斥するのです。念佛の方では法華經は結構だ、これは洵に高尚な教で結構であるが、世が末になつて、人の機根が悪くなつたら、そんな難かしい教を教へたつて解る者はありはしない。だからそんな難かしい教も結構だがマア／＼それはソツとして置いて、阿彌陀様を頼んで極樂に往生することを求めるより仕方がない。教は結構だが、どうも時代に合はない、今の世の中は忙しくて、そんな難かしい理窟を言つて居る時でな

れ、盗むなかれ、嘘をついてはいけない、人を罵してはいけないと言ふやうな大事な教を實行する方が宜い。經典などは彼此れひねくつて居つても世の中は救へるものではないといふやうな主張でありますから、これも無論法華經を排斥する。

だからこの四つの教は皆法華經を排斥する。その法華經を排斥する教を向ふに廻して、法華經を弘めようといふのだから、それは間違つて居るといふことを言はなければ法華經は弘まらぬ譯でせう。だから徒に諸宗を攻撃するのではないので、諸宗で法華經を排斥して居るから、その排斥することがいけないといふことを明かにしなければ、法華經は弘まる譯はありませぬ。

これが所謂日蓮上人の「四箇格言」といふものであります。日蓮上人が徒に敵を作るとか、新しく宗旨を立てるといふ風に考へるのは、それはまるで誤解でありまして、さうではない。法華經を弘める



以上は、四つの宗の間違ひを正すより外ない。それだから日蓮上人は

佛念無間  
禪 天魔  
眞言亡國  
律國賊

といふことを言つて居られるのであります。これはこの四つのどれにも通するのであります。念佛だけが無間ではない、禪無間と言つても眞言無間と言つても宜いのです。又天魔と言ふことも念佛天魔と言つても眞言天魔と言つても宜いので、これはどれにも共通するのです。念佛だけが無間といふことではない。禪だけ天魔といふことではないのであつて、要するに佛の御精神に違ふといふことなのです。それを無間とか天魔とか、そんな言葉で言ひ表はしたのであります。どれにも共通するのであります。

にばかり應用しなくても宜い、皆各宗に對して批判された譯であります。この批判は日蓮上人のなかなか鋭い所であります。

それはナニモ他の宗に恨みがある譯ではないけれども、只今申すやうに、法華經を弘めるといふことになりますれば、法華經の弘まる道を塞いで居るものを排斥しなければ法華經そのものが弘まりませぬから、そこで所謂四箇格言といふやうなことを言はれるのであります。この事は能く注意しなければならぬ事でありませぬ。だから世の中の人が念佛も禪も信じない時に「念佛無間禪天魔」と言つて見たところ、的の無い所に矢を射るやうなものであります。今日蓮上人が世に出られたら、四箇格言やなくて一箇格言であるかも知れない。私共は始終さう思ふ。道も教も辨へないで自墮落な物質的な生活をして居てはいけなさとキツト日蓮上人は仰しやるだらう。鎌倉時代には念佛や禪が盛であつたから

ところが何故念佛に對して無間と言つたか禪に對して天魔と言つたかといふと、それはその宗で言つて居る言葉をひつくり返して批評したのです。念佛の方では、阿彌陀様を念ずれば極樂へ行けると言ふから、イヤ極樂ではない、無間地獄だぞと逆を言ふ。なか／＼これは皮肉な譯です。それから禪の方では禪をやつたら佛に成ると言ふから、イヤ佛に成れない、天魔だぞと言ふ。それから眞言宗では、眞言に依つて國家を護ると言ふから、イヤ、國家を護るのではない、國を亡ぼすのだぞと言ふ。又律の方では、國師だといふことを言ふ。それは朝廷の御師依を得て居る者が律の方に多くありましたから、それで律は國の師だと言つて居りましたので、日蓮上人は、お前の方は國師だと言ふけれども、國師ではない、國賊だ。斯ういふやうに向ふの主張する逆の言葉を使つてこれを批判されるのであります。これは、必しも無間を念佛ばかりに應用し、天魔と禪

それではいけないと言はれたのであつて、これは時代に依つて違はなければならぬ。律國賊と言つて見ても、今頃律を守つて居る者は一人も無いから、一人も無いのに攻撃して見ても追つかない譯でありませぬ。今なら四箇格言は、昔のやうなものでなく、やはり今の時代に合ふやうな格言にされるべきであります。それをたゞ言葉の眞似だけして振廻して見たところで仕方がない、その精神を採らなければならぬ。日蓮上人はどうしても法華經を弘めることに依つて一切の人を救はうといふ決心が盛で居らつしやつたから、それで法華經の弘まる道を塞ぐものに對しては徹底的にこれを排斥する、さうして法華經の弘まる道を開いて行かう。斯ういふことであつたのであります。その所はどうか間違ひのないやうにありたいものだと思ひます。

それで今こゝもさういふ事を言つて居るのです。華嚴とか、法相とか、三論とか、眞言とか、念佛と

いふものは眼がハッキリしない。この經典の境目が解らない、それでいろ／＼なお經と法華經と同じだと思つて居るが、それは極く考が足らない、斯ういふ風に極く殿しい批判をこゝで與へられた譯でありませす。

但し在世は四十餘年をすて、法華經につき候ものもやありけん。佛滅後に此經文を開見して信受せんことかたかるべし。先一には、爾前の經經は多言なり、法華經は一言なり。爾前の經經は多經なり。此經は一經なり。彼彼の經經は多年なり。此經は八年なり。佛は大妄語の人永く信ずべからず。不信の上に信を立てば、爾前の經經は信ずる事もありなん、法華經は永く信ずべからず。當世も法華經をば皆信じたるやうなれども、法華經にては

を本當に信ずるといふ一三昧の心持になりにくいかも知れぬ。何故かと言へば法華經を説かれる前のお經といふものは澤山ある、法華經は一言だ、だから「マア、たんと書いてある方が本當だらう」こんな風に入の心はその方に惹かれるかも知れない。爾前の經は數が多いが法華經は一つの經である。又他の經は四十餘年の間に説かれたものだが、法華經は八年の間だ、それだから「どうもこれは眞實ではない」斯ういふやうに思ふ。さう思ふといふと「佛は大妄語の人」今まで仰しやつた事と後で仰しやつた事と違ふから、佛様はどうも何を言つて居らつしやるか解らない。斯う思ふ。併しマア兎に角人の爲に善い事を仰しやるのだからと思つて、當にならなと思ふ心持を打返して、又どれかを信じようといふことになる、四十何年の間の教の方が多から、それを信ずるやうな心持になるかも知れない。これは人情としてさうなる。さうして「法華經は永く信ずべか

なきなり。其故は法華經と大日經と法華經と華嚴經と、法華經と阿彌陀經と一なるやうをとく人をば悦で歸依し、別異なるなど申人をば用いず。たとひ用れども本意なき事と思へり。

但し釋迦様が居らつしやる時には、四十餘年の説法の後に於て「正直に方便を捨て、但だ無上道を説く」と仰しやつた。今までのほうは方便だ、今までの方便を止めてこれから眞實の事を説くぞと釋迦様御自身が仰しやつたのだから、他の者も四十餘年の教を捨て、法華經に就て、法華經の教は有難いと思ふ者があつたらう。ところが釋迦様が滅くなつた後になると、どうもどれがどれやら解らなくなつてしまふから、そこでいろ／＼なお經を見ると、どの經にもこの經が大事だ、と書いてあるので、ツイ思ひ違ひをして「信受せんことかたかるべし」法華經

「法華經といふものは八年の間説かれたのだから四十何年の教の方が宜からうと思つて、法華經を信じないやうになるだらう。そこが大事な事であつて今の世でも法華經を信ずるといふ人があるやうだけれども、今のやうな信じ方は本當の法華經の信じ方ではない。何故ならば「法華經も善いけれども、他の經も善いといふやうな中途半端の、なまぬるい心持で信ずるのだから、法華經を信じたと言つても本當に法華經を信じたとは言へない。斯ういふのでありませす。」この事は互に能く考へなければならぬのであります。信仰の中心といふものがしつかりしなければならぬ。心の主は一つでなければならぬ。心の中心があつちへ行つたり、こつちへ行つたりしたのでは、吾々の生涯の方針が附かない。だから心の中心は一つでなければならぬ。その意味に於て、法華經といふものが一番佛様の眞實の教であると知つた

ならば、法華經を中心として、自分の信仰を立てるやうにしなければならぬ。

そこで法華經を中心として、これに一切の考の土臺を据えて置いて、それから今度は他の經を讀んで見ると、どの經に説いてある事も法華經中心の信仰を助ける力を有つて来るから、一つも無駄にならない、そこをしつかりと考へることであります。中心は一つでなければいけない、あれも宜からう、これも宜からうといふのでは、自分の歩いて行く道がさまりませぬから、ちやうど諸經の中に於て眞實の經であるといふ法華經を中心として、それからこの信仰を助けるものとして、モツと眼を大きく開けて一切の經典を讀むならば、有ゆる經典が力になるのであります。決して他の經を讀んでいけないといふことは無い。それはよく又誤解がある。私の友達などでもよくそんな事を言ふ『日蓮上人は法華經一つだ一つだと言ふけれども、日蓮上人の御遺文を見る

眼を移してはいけない、斯ういふ意味であります。だから法華經の中には

### 餘經の一偈をも受けず

とありまして、他の經の偈一つでも受けないといふのは、習はないといふことではない、それを受けて自分の信仰の中心としない、自分の信仰の中心にそれを置かない、斯ういふ意味で受けずとあるのであります。そこを讀み違へて、法華經を讀む者は他のものを讀んではいけないのだといふやうに、さう淺薄に思つては間違ひでありまして、無論自分の信仰の中心が確立して居りますれば、たゞお經ばかりではない、孔子の教でも、場合に依れば耶蘇の教でもマホメットの教でも、皆それは参考としては大きな役に立つのでありますから、そんな偏狹な心持を有つ必要はない。併し何しろ中心がさまらなければいけない。法華經一三昧にやらなければならぬ。何故

と、いろ／＼な經典を非常に多く引いて居るではないか、どうしたのだらう』斯ういふやうな事を言ふ。それは引いても宜しい、法華經を中心としてちやんと自分の信仰を確立して置いて、それから讀んで見れば、どの經典でも皆それ／＼善い事を言つて居るのでありますから、これは無論讀んで宜い。その中心をきめないで、たゞ無暗にお經を讀んで『あの經には斯うあるからあれも宜からう、この經には斯うあるからこれも宜からう……』といふやうな譯で、心があつちへ行つたり、こつちへ行つたり、グラグラして居つては結局何を信じたら宜いか解らなくなつてしまふ。だから中心をきめることが大切であります。

だから日蓮上人は、法華經を中心とさめるといふ時には、法華經以外の經は一切要らないと言はれる。この場合の要らないといふのは、本當に要らないのではないが、自分の信仰を決定する上に於ては他にそれなら法華經一三昧にやらなければならぬかといへば、それはお釋迦様御自身が、法華經に於て、これこそは自分が本心を打込んで説いたものだと思つて居られるのだから、それを自分の信仰の中心として、さうしてこの法華經中心の信仰を助ける爲に、いろ／＼な經も傍ら讀んで、見聞を弘めて、自分の智慧を啓くといふことも結構なのです。阿彌陀經を讀むも宜からう、大日經を讀むも宜からう、何を讀んでも、自分の心の中心が動かなければ、見る物、聞く物、皆それ／＼役に立つて来るのであります。日蓮上人が法華經一つで澤山だと仰しやつたからといふので、『他の經典を讀むのは皆罪だ』といふやうな、さういふ考を有つてはいけないのであります。

又社會が複雑になれば、いろ／＼な問題が起きますから、その問題を解決する爲にはいろ／＼な經典を讀むことが宜いのであります。法華經は、凡夫が

大乘の修行をすれば必ず佛の境界に到達出来るぞといふ、この大事な問題を解決する爲に説かれて居るのであります。その法華經の中には枝葉の小さい問題は一切論じてない。ところが吾々の心の中には案外枝葉の問題が起つて来るのであります。これを法華經で解決しようと言つても法華經の中には説いてない。それは例へば人間の迷ひはどうして起るのだらう、どんなにしてどんな迷ひが起るのだらうそれを知らないと考へて、法華經を幾ら読んで見ても、そんな事は書いてない。それは阿含經を讀めば宜い、阿含經の中には凡夫の境界を説いて、凡夫の迷ひを起す状態が詳しく説いてあるから、迷ひを起す根本を知りたかつたら、阿含經を讀むが宜しい。又佛の智慧はどんなものだ、佛の一切の人を救ふはたらしはどんなものだといふ、佛に就いての詳しい説明が知りたいと思つて法華經を讀んでも、法華經の中には佛に就ての説明は殆どない、たゞ佛と佛と

のみが諸法の實相を知るといふくらゐで、佛に就ての説明といふものはありはしない。ところが華嚴經を讀んで見ると、その中には、佛に就いての説明は事實を擧げて實に細かく説いてあるから、佛とはどういふものか、菩薩とはどんな徳を具へて居るかといふ、さういふ細かい説明が欲しかつたら、華嚴經を讀んだら宜いのであります。

斯ういふやうに、一たび自分の信仰の中心が確立しますと、有ゆるお經が皆力になるのであります。そこは法華經の信仰といふものの非常に大きな所なのであります。中心をしつかりきめれば、どれでも皆信仰の助けになります。日蓮上人御自身がその通りでありまして、法華經を自分の心の中心と定めに成り、有ゆる經典を讀んで居られる、單に經典ばかりではない、佛敎以外のものを讀んで居られる。だから日蓮上人の御遺文を讀んで見ると、何でも出て来る。併し中心は動かない、斯ういふことであり

まして、これは非常に大事なことであります。

それが「正偏知」であります。正しく中心をちやんときめて置いて、偏く總てに亘つて知る。それでなければいかぬのです。佛様が正偏知であると言はれる以上は、吾々も佛様のやうに、佛様を本として、正しく偏く知るといふことになつて行かなければいけない。固陋になつてはいけない、頑固になつて「これさへ知れば宜い、他のものは皆駄目だ」といふやうになつては、それでは活きた世の中に立つて活きたはたらきをすることは出来ない。と言つて又た八方に手を擴げて、あれも知つて居る、これも知つて居るといふだけではいけない、正偏でなければいけない、正しく中心を立て、さうして後に偏く能く知る。斯うなつて行けば、それが本當だらうと思ひます。

英吉利の哲學者でハミルトンといふ人があります。が、その人が面白い事を言つて居る「漏斗のやうに

やれ」と言ふ、漏斗といふものは、誰でも知つて居るやうに、口が廣くて終ひが一つ所に纏つて居るのであります。あゝいふやうにやれと言ふ。成程廣くやつてたゞ廣いといふだけではいけない、一つの所に纏らなければいけない。ハミルトンはうまい事を言つて居る、漏斗のやうにやれ、たゞお皿のやうに廣いばかりではいけない、さうかと言つてチューブのやうに細長いばかりではいけない、漏斗のやうに、澤山知つてそれが一つ所に歸着する。心の中心が動かないやうにやれといふことをハミルトンが言つて居りますが、洵にその通りであります。吾々は何とかして自分の信仰の中心を動かさないやうにしつかりと立てなければならぬ。と同時に、又その信仰を助ける爲に役に立つものならばどれを學んでも宜しい、そんなに偏狭な心持を有つには及ばないだらう。斯う思ふのであります。

それでありまして日蓮上人が「念佛無間・禪天

魔」といふことを仰しやつたのを、その口真似だけを  
 して、他のものを皆排斥して「法華經一つで澤山だ  
 他のものは穢しい」といふやうな、そんな心持を有  
 たないやうに、心の中心をしつかりきめて、さうし  
 て出来るだけ廣く學び、多く習ふといふことが洵に  
 結構だらうと思ひます。これは洵に餘計な事を申す  
 やうでありませうけれども、どうも、そこに誤解があ  
 りますから、ちよつとこの場合申して置くのであり  
 ますが、今この所を読んで見ても、さういふつもり  
 で讀めば宜しい。法華經は眞實の教ナンだから、  
 經と經と比べて見て、法華經を中心として、これを  
 本當に自分の信仰の目當として行くやうにせよ。さ  
 う思はないで、たゞどれでも似て居る、法華經でも  
 大日經でも華嚴經でもマア似たものだ、別に悪い事  
 を教へるのではないから、どれでも宜からうなどと  
 今の人は思つて居るか知らぬが、それでは信仰の中  
 心といふものが立ちあはしない。自分の信仰の中心を

しつかりと立てなければいかぬといふことを言つて  
 居られるのであります。たゞ一面を見ますと、一切  
 を排斥されるやうに見えますけれども、今申したや  
 うな意味で決して他を排斥する譯ではないので、信  
 仰の中心を法華經に定めた以上は、有ゆる教を學ん  
 で、皆自分の信念を養ふことに役に立てば、これ程  
 結構なことはないのであります。そこらを餘程しつ  
 かりと考へて置くことが必要であると思ひます。  
 (第九講了)

法華三昧の行持とは、今日より思ひ立ちて、憂きにつけ  
 つらきにつけ、悲しきにつけ嬉しきにつけ、寝ても覺め  
 ても、起つても居ても、只管に法華の首題を南無妙法蓮  
 華經、南無妙法蓮華經と間もなく唱へらるべし。此の首  
 題を杖にも力にもして、是幸とも法華眞の面目を見届く  
 べしと深く望をかけて唱へらるべし。  
 —白隠禪師—

遺教經雜感

○遺教經 一卷。姚秦、鳩摩羅什三藏の譯、具には佛垂  
 敎涅槃略說教誡教といふ。佛、須跋陀羅を度し了り、中  
 夜、娑羅雙樹の間に於て、まさに涅槃に入らんとし給ふと  
 き、諸弟子のために最後に下し給ひたる教誡也。如來の滅  
 後、諸弟子の取るべき道を教示し、波羅提木叉(戒のこと)  
 を本師として心を攝め、五根(眼耳鼻舌身)を制し、小欲知  
 足し、常に閑處に道を修め、放逸を去つて精進すべきを説  
 き、慈意痛切を極む。——活々佛敎辭典より——

量から云つて極く短く、實から申しても至つて平凡な遺教  
 經を、今更ら改めて語るまでもないでせう。しかし、私は此  
 の經を、法華經に次で愛誦いたして居る者なのであります。  
 これと云ふ深いわけが、別にあるのでもないのですが、短し  
 と雖も、一經として前後が如何にも整然と纏つて居りますし  
 平凡なりとは云へ、得て亂れやすい私共には是非肝要な日常の

笹木欣爾

生活規範ともなす可き條々が、節から節へと次第よく語り  
 纏がれて居りますので、いつとはなしに親しみ始め、今では  
 無くてならぬ座右の一書となつて了りました。

元々、右の如き平凡な一小經典でありますから、餘程秀で  
 た眼を以ていたしましても、さしたる感想の此の經中から湧  
 こう苦もありません。まして、私輩においてをやであります  
 が、いたらぬながら、日頃愛誦の折々に、時には浮んで參つ  
 た二三のことどもを、少し書きしるしてみたいと存じます。

遺教經を讀みまして、一番初めに氣付きますのは、經中  
 に「汝等比丘」と云ふ呼びかけ言葉の大層多いことでありま  
 す。正確に勘定しましたなら、相當の數にもなりませう。こ  
 れからしても判りますやうに、此の經は、比丘——即ち俗人  
 ならざる僧侶を相手として説かれたのであります。そんなら  
 俗人——殊に現代の私共には、凡そ縁遠い古色蒼然たる古典

かと云ひますのに、僅か二三の個所を例外といたしますならば、その他の全部は全くそのまゝ、直ちに以て只今の私共にもよく當てはまるのでありまして、時と人とを超越した此の經の妥當性は驚かされるばかりであります。

遺教經の説く所は、主として戒律であります。此の經の如何なる經典であるかに就いては、冒頭に抄記して置きましたから、こゝには、話の順序として、その内容をなす戒律の要目を列記いたしてみませう。

初めに世間法要に屬する事柄が擧がつて居ります。尙括弧内は念のために、姑くわたくしに加へたのです。

## I 世間法要

- 一、邪業を誡む(比丘として避く可き業を誡む)
- 二、根心を誡制す(眼耳鼻舌身の五根を制す)
- 三、多求を誡む(多く求むるなと誡む)
- 四、睡眠を誡む(おこたりとれむりのいましめ)
- 五、瞋恚を誡む(いかりのいましめ)
- 六、貢高を誡む(貢高は自ら高ぶり他を輕んずること)
- 七、詬曲を誡む(詬曲はヘツラヒマゲルこと)

世間法要と標してありますやうに、これ等は至つて一般的な教へばかりであります。鳥渡見ますと、私共の日常生活に餘りにも即しすぎてゐるため、かゝる判り切つた事柄なら、

ります。各々は各々の證據あつてのことだとは存じますが、求道者として此の經を手にする者は、よし假令それが小乘經典であるとした處が、内容そのものゝ尊貴性や眞實性に變りなき限り、更に痛痒を覺えないのであります。大體、大乘は尊し、小乘は卑しとする從來の考へ方が馬鹿々々しく思はれます。佛教は宗教です。宗教は床の間の飾り物ではありませぬ。實際的な生きものである筈です。眞實にして而も私共の實生活に役立つものがあるなら、大乘小乘の品定めなどないたして居るよりは、直ちにドシ／＼實行に移す可きでありませう。詮すれば、大乘經典よりは寧ろ小乘經典の方に、卑近な實際的な教へが多いのではないのでしょうか。私は此の點で、法華經と共に小乘阿含の尊重すべきを説かれた 日生上人の御卓見に非常に啓發された一人で、その教恩には今に感謝いたして居る次第であります。

遺教經が大乘であらうと、又小乘であらうと、そのどちらであつてもよいとして、私などが素人眼に見ましても、此の經に小乘臭のあるのを認めません。けれども、その殆んど全部が現在の私共俗人の生活裡へ、價値豊かに迫つて參るのですから、量が短くて仕末のよい點からも、内容が平易で讀みやすい點からも、もつと一般に廣く愛讀されてもよろしからうと思ひます。

已に世間一般の道德でさへ説くから、何も殊更ら宗教たる佛敎經典にまつまでもないと云ふ説りを受けるかも知りませぬ。それに、以上は皆、何々はすべからずと云ふ消極門のみでありまして、かく／＼は進んで行ふべしと云ふ積極門は一つも説かれて居りません。處が次に第二の出世間法要の部類に至りましては、いよ／＼積極門が述べられ、又一々の内容も普通道德を一步突込んだ宗教味が滲み出て參つて居ります。

## II 出世間法要

- 一、少欲功德(欲を少くすること)
- 二、知足功德(足を知ることを)
- 三、遠離功德(心身を亂すものから遠ざかることを)
- 四、精進功德(正しき努力すること)
- 五、不妄念功德(六塵の境界に食着せざる心のことを)
- 六、禪定功德(念を一境に努め散動を離れることを)
- 七、智慧功德(眞諦俗諦を照知すること)
- 八、究竟功德(最論せざることを)

右の如く、淺きより深きへ、消極門より積極門へ、道德より宗教へと云ふ次第順序を追ふて、遺教經一卷は、結局人として人たり得る宗教至高善の實踐を教ふるものなのであります。

遺教經は大乗教典なりや、はた小乗教典なりやとの論があ

人として生れて本當に生き切らうとする者は、結局、宗教に道を求めずに居られないでせう。宗教に道を求めるとは、信仰を握つて法悦三昧に没り、安泰な一生を送らうがためでないでせうか。そして、その信仰なり、法悦なりを得んものと、若しその人が佛教徒——もつと範圍を狭ばめて 日蓮教徒であるとしたら、或は唱題をし、或は讀經をし、或は御書の研讀をし、其他まだ／＼力を極めて所謂修行なるものに精進いたすことでありませう。法悦境に登らんものと、精進いたすのであります。これが、普通に見受ける、信を求むる者の態度であります。しかし、これでは修行が全く宗教的安心や法悦三昧を得るための手段となつてゐるのです。修行がたかまればたかまる程、功利的の臭ひがたゞよつて來ます。この調子で進めば、一たびこゝろさず安心やら法悦やらを握つて了へば、あとには修行が不必要と云ふことになりませぬ。法悦の獲得が唯一の目的の修行だつたのですから、法悦だけに用があるもので、堅苦しい修行はなるだけ早く捨てたいのです。修行とは、かゝるものでせうか。果して、修行が法悦に到達するまでの單なる手段や方便であつてよいのでせうか。

私は明確に申し切ることが出來ます。かゝる修行は且く常識圏内か又は低俗な宗教にあつてのそれで、眞の宗教では、今一步突込んだ意味の修行を説くのだと。常識圏内では、總べて百般の事柄を相對的に對立的に見ようといいたします。

世間は皆、矛盾律から成り立つてゐるのであります。

例へば、善悪、美醜、吉凶、貧富等々、擧げ始めればなほ切りがありません。従つて、修行と法悦でも相對する二個のものとなるのであります。修行をするから、その報ひとして法悦が湧くのだとするのであります。常識人としての我々には、誠に判りやすい常識的な見方です。しかし、いかに判りやすくとも、押しつけて行くと功利的になり、不徹さをあらはす此の見方には眞の求道者は敬服しないでせう。法悦を得んための修行が決して悪いものではありません。たゞ、その對立的差別が強くなり過ぎて、修行をあくまで法悦を得るまでの手段だとする處に面白くないものを生じます。

眞の宗教の領域では、常識圏内に於いて對立する二ツとしたものを、二にして而も一なる渾然たる一如の境地に歸せしめます。修行と法悦との相反する二ツをも、二にして二に非ざる一如と觀じ、法悦のための修行など云ふ不徹底な扱ひ方をいたしません。法悦を得んとして修行しつゝある過程そのものを、そのまま法悦とするのであります。するのではありません、修行がたしかにそのまゝの法悦であるのです。常識的には鳥渡受取りにくい話ではありますが、一如の境地に進入れば、修行はそのまま法悦であり、法悦三昧とは修行の過程そのものであるのであります。眞の宗教生活にあつては修行以外に何物もなく、別に改めて求むべき法悦もありません。

唱題等をするだけで、肝心な日常生活は亂れてはゐなかつてせうか。戒律を輕視して尊重せざる生活は、たゞさへ動搖しやすい官能をいよ／＼動搖せしめます。その結果の如何におそるべきかは、此の經にも説いて居ります。

若し五根(眼耳鼻舌身の五の官能)を縱にすれば、唯だ五欲(色聲香味觸の五欲)のみに非らず將に淫(淫)呼(呼)無(無)くして制(制)す可(可)らざらん(ざらん)とす。亦た惡馬(惡馬)の轡(轡)を以て制(制)せざれば、將に人を牽(牽)て坑(坑)堦(堦)に墜(墜)さんとするが如し。劫(劫)害(害)(盜賊の類)を被(被)むるが如きも苦(苦)一世(一世)に止(止)まる。五根(五根)の賊(賊)禍(禍)は、殊(殊)累(累)世(世)に及(及)ぶ。客(客)を爲(爲)すこと甚(甚)だ重(重)し。愼(愼)まらずんばあるべからず。

云々と。五欲を制せずして口先だけで讀經唱題したり、日常の脚下をつましまないで頭だけで研鑽いたすのでは、遺憾ながら修行がそのまま法悦と云ふ、望ましい一境に住するわけには参りませぬ。修行即法悦の一境に至らんには、五欲に躍る心が忘れられてはなりません。己れが自らの心の師となつて、奔馳する五欲煩惱を統御しつゝ、讀經唱題や其他をするのでなければなりません。宗教の修行とは、單なる讀經唱題等には非ずして、それ等に並行して、戒律による心身の調御があらねばならないのです。戒律による心身の調御ある處にこそ、修行即法悦の莊嚴境がひらかれても参りませう。戒律の尊重は、常識世界にあつても必要ですが、宗教の領域ではなほ一層なくてはならぬ一事であります。道教經は説いて

ん。修行そのまゝが直ちに大なる歡びであつて、修行の一步一步が歡喜となるのであります。所詮、眞の宗教の境界では唱題や讀經や研鑽や、その他いろいろの所謂修行と云はれるものが、かた苦しい修行と云はんより、これ等が直ちに歡喜法悦であるのであります。

かく申し去つて、扱、ひとり靜かに考へまするに、修行即法悦の宗教的境界の、誠に解しやすくして而も實際には如何にも行じ難きを痛感いたさず居られませぬ。感らざる告白をいたすなら、私自身ときたまは、この一如の境界の片鱗をなり味ひ得たるが如く感じまして、後には直ぐ修行と法悦との分裂が訪れて来て、その離反相剋に悩まされるのを常といたします。宗教の世界に飛び込むには、少々常識的に小さか過ぎるのかも知れませぬ。でも、此の一如なる境地は私のいたらぬ頭から強いて絞り出した無理な考へではいけません。相ひ對立する二個の存在は、渾然たる一如の境に至つてこそ始めてその所を得て落ちつくのです。宗教的一如こそも本来の自然の姿なのであります。それなら何故に、私共は本来の姿に安住し得ないのでせう。なぜ修行即法悦の一境に止住し得られないのでありませう。

私はこゝに、戒律の尊重を語るべき地點に参りました。前の所謂修行なるものには、戒律を尊重して己が日常生活をつしむと云ふ一面が實踐されてゐたでせうか。修行とは讀經居ります。

戒は是れ正(正)順(順)解(解)脱(脱)の本(本)なり。故(故)に波(波)羅(羅)漢(漢)木(木)又(又)と名(名)く。此の戒に依(依)因(因)すれば、諸(諸)の禪(禪)定(定)及(及)び滅(滅)苦(苦)の智(智)慧(慧)を生(生)ずることを得。是の故に比丘(比丘)、當(當)に淨(淨)戒(戒)を持(持)つて毀(毀)缺(缺)せしむること勿(勿)るべし。若し人能(人能)く淨(淨)戒(戒)を持(持)すれば、是れ則(則)ち能(能)く善(善)法(法)あり。若し淨(淨)戒(戒)なければ、諸(諸)善(善)の功(功)德(德)皆(皆)生(生)ずること得(得)ず。是を以て當(當)に知(知)るべし、戒(戒)は第一(第一)安(安)穩(穩)功(功)德(德)の住(住)處(處)たることを。

戒律と一口に云ひましても、少なきはたゞの五戒から、多きは比丘尼の五百戒まであります。それに、大小乗の諸戒律が全部無條件に、私共の今日の生活に當てはまるわけでもありません。中にはそれ程必要でないものもあり、又、中には却つて捨つ可きものもありませう。戒律の取捨鹽梅は容易ではいけません。その意味で、此の道教經などは、繁簡まことにその度を得、適否まつたくその要を得た一經と申すことが出来ませう。私は己れの信仰生活に、戒律の實踐を念願して居り、戒律の基準として道教經を愛誦いたす次第なのであります。

道教經は主として戒律を説きますので、普通から行けば無味乾燥な沈鬱な老經となる筈であります。しかるに、讀んで別に信願(信願)を覺えしめないのは、小篇であるのと、經中に譬喩多きと、そして行文の流暢なるとに依るのでせう。

此の經が短いことは、前に己に申しました。ある註解書を見ましたら、全文で二千三百字に過ぎぬとありました。玄奘譯の般若心經が二百六十二字、此の經と同じ羅什譯の法華經が六萬九千三百八十四字なるのと較べるも一興です。二千三百字と云へば、文部省制定の常用漢字數の二千とほぼ等しく、常用漢字と遺教經の漢字とは、字の性質に異りがあるといたしても、兎に角此の經が如何に短編であるかは自明であります。若しこれが大部の經であつたら、譬喩でいかほど洞ひをつけ、文章の流麗さでどんなに滑りを加へませうとも内容は内容だけに流麗さはまぬかれ得ないでせう。大小の律部は、バラ／＼と俗に云ふ轉讀をして、中をテラリと瞥見したゞけでも、頭が重くなります。短篇にとゞめた遺教經の原作者の要領のよさに、敬服いたします。

此の經には、譬喩が随分と多く引用されて居ります。大部分は一々譬へばと斷つてありますが、中には何とも斷らずに直ぐ譬の引いてある個處もありました。遺教經は戒律の列舉と譬喩の引用とで組み立つて居るのだとも申せませう。譬を引く時くらひ、その人の頭腦のきらめきを示す場合はありますまい。斯どころの外れた譬へなどを引いたら、折角の譬も目茶苦茶となつて了ひます。その代り、急所を突いた譬へほどピンと来るものはありません。私は此の經を讀む毎に譬喩の妙味に心底を打ち込まれ、作者の才華に思はず感嘆いたしました。

す。此の經に於ける多くの譬喩と、そのどれもつまみは、此の種の經典の陥り易い流麗を、いくら教ふてゐるか計り知れませんが、又、譬喩の内容を類別して考察するのも面白いと思いますが、今は略します。

遺教經の文章は、流暢であつて又いかにも引き締つて居ります。頭の髓を鋭利な鎌やうなものでギリ／＼採み込まれるが如くで、而も一更に不快を受けず、却つて緊張裡のころよさを催さしめます。何も書いてある内容が、頭にこたへる戒律だからと云ふのではなく、構想の洗練、詞彩の配當、用語の布置、行文の音調等が、芳潤な緊迫感をあたへるのであります。これ全く、印度の作者の著想よろしきを得たと支那羅什三藏の翻譯の精妙を極めたとに依りませう。私は漢字の聲韻には盲目の者ですから、今は此の經を假名交りの國譯文として讀んだ感じを述べてゐるのであります。羅什三藏は當時の音讀法に依つて初めて感興の湧くやう翻譯したのでせうから、國譯文にしてつたのでは、二番煎じのうらみなしといたしませんが、王朝時代の文選や白氏文集が、漢文にして、而も漢文に非ざる國譯文として尊重されたのを考へ合せれば、此の私の扱ひ方も滿更らぬがひでもありますまい一例までに、經の初めと終りの所を挙げて見ませう。

釋迦牟尼佛、初に法輪を轉じて、阿若憍陳如を度し、最後の説法に須跋陀羅を度したまふ。應に度すべき所の者は、

皆已に度し説つて、娑羅雙樹の間に於て、將に涅槃に入りたまはんとす。是の時、中夜、寂然として聲なし。諸の弟子の爲に略して法要を説きたまふ。……

汝等比丘常に當に一心に出道を勤求すべし。一切世間の動不動の法は、皆是れ敗壞不安の相なり。汝等且く止みぬ。復た語いふこと得ること勿れ。時將に過ぎんとす。我れ滅度せんと欲す。是れ我が最後に教誨する所なり。

遺教經に列記してある戒律は、一見した處まことに平凡に過ぎるやうではありましたが、それを日常生活に親しく實踐するとなれば、仲々容易ではありません。その容易ならざる戒律を、完全に身に行ひこなしした人を求むれば、矢張り一釋尊であるでせう。釋尊は、遺教經の教説者であると共に、その生ける具現者でもあつたのであります。

此の經は、御在世の比丘衆のために、釋尊がお説きになつたものです。しかし、一たび觀點を變へますと、此の經の作者（編輯者と云つた方がヨリ）層々のやうにも思はれますが、材題（釋尊に對しての）に、それに首尾結構を附加し、一篇に造り上げた點からは、釋尊が提案者で、記述した人が一經の作者ともなり得るから、今は且く作者として論々から申して参りました。その作者が、釋尊の日常に實踐なされた尊い戒律生活のあとを詠み出したのだとも、取つて取れぬことがないと考へます。そう考へまして、私は、此の經を己れの生活規範とすると同時に、吾が

信仰の人的對象たる、釋尊の頌徳表だともいたして居ります。勿論、作者は敬徳文として書いたものではありませぬ。しかし最初から意識して書いたのではないだけに、技巧を弄したあとがなく、却つて敬徳文としては一種變つた面白い結果となつてさへ居るのであります。

無量義經の徳行品は、釋尊の御徳を頌し奉つた一品で、佛徳禮讃の文として比類なしとされます。けれども、こゝでは釋尊の理想化象徴化が多分にほどこされて居て、徳行品を讀みますると、陶然たる景氣に包まれて、高く仰ぐべきみ徳文としてしるすのなら、當然こうなるべきで、御徳の一つ一つを現實的に刻明に直寫するより、むしろ思ひ切つた理想化象徴化を加へる方が、作者の技倆であります。遺教經では、地上に足跡を印した、釋尊の人間像が、何等の象徴も加味されず、さながらにマザ／＼と描かれて居ります。（念記して、此の經は元來が敬徳の目的で書かれたものではありませぬが、讀む個で此の經に記された數々の戒律を、釋尊におあてがひ申して、戒律の實踐者としての聲いお姿を、讀む者自身が己が頭の中に描き出されたりしません。そうでないといふ此の經を以て一種の敬徳文と見なすと云ふ私の堅持）私は、徳行品には徳行品の、遺教經には遺教經の、それ／＼の有する持ち味を汲んで、兩者は共に貴重な敬徳文だといたして居るのであります。（了）



遺教經抄錄 — 世間法要 —

(根本清淨戒)
汝等比丘、我が滅後、於て當に波羅提木叉を尊重し珍敬すること、闇に明に遇ひ、貧人の寶を得たるが如くすべし。當に知るべし、此は即ち是れ汝等が大師なり。若し我れ世に住するとも、此れに異ること無けん。

(根本を誡す)
汝等比丘、已に能く戒に住す、當に五根を制して放逸にして五欲に入らしむること勿るべし。譬へば牧羊の人の杖を執りて之に視し縱逸して、人の苗稼を犯さしめざるが如し。……此の五根は、心を其の主と爲す。是の故に汝等當に能く心を制すべし。心の畏る可きこと毒蛇、惡獸、怨賊よりも甚し、大火の越逸なるも未だ喻とするに足らず。譬へば人有りて手に蜜器を執り、動轉蹣跚して但だ蜜のみを觀て深坑を見ざるが如く、譬へば狂象の鈞無く、猿猴の樹を得て騰躍蹣跚して禁制す可きこと難きが如し。當に念に之を控えて放逸ならしむること無かるべし。此の心を縱にすれば人の善事を喪ふ、之を一處に制すれば事として辨ぜずといふこと無し。是の故に比丘は當に勤めて精進して汝が心を折伏すべし。

(多末を誡む)
汝等比丘、諸の飲食を受くること當に藥を服するが如くすべし、好きに於ても、惡きに於ても増減を生ずること勿

れ、趣に身を支ふることを得て以て饑渴を除け、蜂の華に採るに但だ其の味のみ取りて色香を損せざるが如く、比丘も亦爾なり。人の供養を受けて趣に自ら憍を除け、多く求めて其の善心を壞ることを得ること無かれ。譬へば智者は牛力(信徒の供養)の堪ふる所の多少を籌量して、分に過して以て其の力を竭さしめざるが如し。

(瞋恚を誡む)
汝等比丘、若し人有り來りて節々に支解(四肢五體を切斷)するとも當に自ら心を攝めて瞋恨せしむること無れ、亦當に口を護りて惡言を出すこと勿れ。若し悲心を殺にすれば則ち自ら道を妨げ功德の利を失す。忍の徳たること持戒苦行も及ぶこと能はざる所なり、能く忍を行する者は乃ち名けて有力の大人と爲す可し。若し其れ惡罵の毒を歡喜忍受すること甘露を飲むが如くすること能はざる者は、入道智慧の人と名けざるなり。所以は何ん。瞋恚の害は則ち諸の善法を破り好名聞を壞る、今世後世、人見んことを善はず、當に知るべし、瞋心は猛火よりも甚しきことを。常に防護して入ることを得しむること無かるべし、功德を却むる賊は瞋恚に過ぎたるは無し。白衣(在俗の人)は受欲なり行道の人に非ず、法の自ら制するもの無きすら瞋は猶ほ怒む可なり。出家行道無欲の人にして而も瞋恚を懷くは、甚だ不可なり。譬へば清冷たる雲の中に霹靂の火を起すは所應に非ざるが如し。

記事

本部 團報

日曜講義 毎日曜日午後二時より例會が營まれ、其の中にも六月十三日は久し振りに河合講師の「本佛實在の體験」といふ題下に熱辯を振られ、又二十日には小西講師の五十日間に亘つて滿鮮通歸の印象談を聞き、幾多の寫眞や繪畫で懇説され、吾人は特に在滿居士の誠忠に滿腔の感謝を捧げる、一方に敎家の奮起を嚆矢する。

御書講座 文字通り寸暇もない小林先生が、道の爲め、人の爲め、國の爲めに毎週火曜日晚の御出講は全く羨ぐまじい次第である。日蓮聖人第一の御遺文に對しても、その内容を心の奥底から領解し得ぬ人々の多い日蓮敎徒の姿には全く泣け切らぬ。淺い世間の生活に追はれて、深い自己の生命の尊嚴を輕んずる風潮こそ、今日の非常時と叫ぶに到る根源の一である。

横濱支部報

六月中 毎月濱々として水の如き信仰を續けて居る各家庭のお講は改めて報道せぬでもと思つたが、他の方面から近來横濱の皆様の御聲が知れないので心淋しいと申さる方も有るので略記する。二日は磯子北山家、四日は神奈川佐藤家、九日は磯子高橋家、十四日中區高田家、十九日同青柳家、二十四日磯子大内家、廿日中區川又家の順序で、和賀、磯部兩先生に依つて誘導されて居る。

福島支部報

五月二十七日(木) 午後三時二十分より高商に於て同校日蓮聖人讀御會員並に支部會員にて晝の例會を開く、新入生を加へた第二回目の例會の爲、磯部先生より先づ入門として佛敎大觀に付きお話を承る。

後生徒丈の座敷に入り色々質問等ありて頗る有意義に此會を開す同夜大町中村家 信者多数高商の上夜の例會を營す、今夕は弘道の爲獻身的に御質問の日蓮聖人伊豆御法難に付き種々有難き御法話を承る。一般座談會に於ては岩淵少佐「本多上人著法華經の心髓」の一節朗讀、大江大任の御感想、其他質問等あり一同喜の裡に夜の會を終る。六月十一日(金) 夜七時より大町中村家に於て例會を開く。悉々磯部先生の御臨席を得き敎の根本精神を承る。即ち法華經の敎ふる根本は人の心の懐かき救ひ給ふもので單に肉體の懐かき救ふものでない。人稍もすれば祈禱を以て病を癒すを敎の根本などと考へるは大なる間違なりと戒められた。先生の有難き御法話の後座談會に入る新會員として最近川上とめさん、富塚すいさん、金澤せつさん、渡邊とめさん、三瓶不倫氏等の方々御入會なされ一段と盛會であつた。殊に三瓶氏は阿武隈川より日蓮聖人の御木像を御取得なされ、誠に有難き佛縁と厥然本日より本會に加はり、私共と一緒に信仰の喜びを受けることになりました。

二本松敎信

五月十五日 二本松佛敎不樂會托鉢修行。
同 十九日 午後一時五十七分歿死者遺骨通過す因つて出迎讀經す
同 二十日 午後四時三十分遺骨通過す因つて出迎ひ讀經す。
同 二十一日 蓮華寺にて題目講修行す。
同 二十七日 午後七時十一分遺骨到着す因つて出迎讀經す。

團費誌料維持費及寄附金額收

(自五月二十一日)  
(至六月二十日)

金壹圓貳拾錢也	萩	石山	堅殿
金貳拾圓也	東京	柴田	武治殿
金貳圓八拾錢也	京都府	大槻秀三郎殿	
金貳圓五拾錢也	福島	中山	齊司殿
金五圓也	市川	立正	會殿
金貳拾錢也	千葉縣	前田	日應殿
金貳拾錢也	東京	窪田	哲夫殿
金貳圓五拾錢也	久留米	平岡	越郎殿
金貳圓貳拾錢也	東京	栗原	敬三殿
金貳圓貳拾錢也	富山	岡	爲太郎殿
金五圓也	西宮	岸	邦太郎殿
金六拾六錢也	札幌	林	啓太郎殿
金五圓也	大阪府	小園	三平殿
金拾圓也	東京	山田	葵二殿
金貳圓貳拾錢也	同	井上道太郎殿	
金貳圓貳拾錢也	同	田中	米吉殿
金貳圓貳拾錢也	宮城縣	八木	左一殿
金貳圓五拾錢也	東京	内倉	治吉殿
金貳圓五拾錢也	福島	三澤	沖江殿
金六拾多錢也	萩	小高	興吉殿
金貳圓貳拾錢也	山口縣	中村	明法殿
金拾圓也	東京	佐藤梅太郎殿	
金貳圓五拾錢也	同	細谷	宗司殿

財團法人統一團會計

編輯室より

◇本多上人の聖訓摘要が数回休載の處、本月は恰度本尊阿答鈔の大事の一節が抽出し敷演されて居るのは、因縁の然らしむる處でありませうが、時節柄各位の御精讀を切望する。かの法と人とが分離したり、國家と宗教とが同一線上におかれる時、異論葛藤を生ずるであらう、猿を離れて肝を求めんとする龜や、味増も羨も一緒にする處に鼻むけならぬ諺を聞く。お互はモット我見を去つて眞劍に求めたいものである。

◇故親木師の遺稿、今回より宗義篇となつて初心の方には御参考になり、悦ばれるでしょう。筆硯の教化が百世を照らす事實を示されたるを深く感ぜしめられる。

◇小林先生の題目鈔講話は、佛弟子たる舍利弟等二乘の尊者が、いかなる地智にあつたか果して二乗成佛といふことが、どれ程佛教に

於て重大性を帯ぶるかを拜する上に極めて大事な論議が説かれて居る。

◇日蓮信者は口ばかり連者で、行が缺けたり迷信摺りして祈禱だとか、二十八宿だとか、方向を氣にする者の多いことを慨して、笹木氏は、釋尊最後の遺教經雜感に寄せられたことは洵に有難い。大乘無戒を高調する者は須らく「五戒は破るといへども大乘戒は持つたりといふ事は之なし、根本戒と名くるは此故なり」の聖訓に屁理窟は附加したくない。

◇大藏經要義續篇が甚だ年不本意一回休載させて頂きます、來月は必ずこのうめ合せを致す豫定ですから御諒承願ひます。

◇本誌は宗教の眞價を擁護するあまり時代から超然たる傾向もあり難く、若干不満の方が無いでもないと思ひますが、そこに又一種の特長もあるのですから、深く頌り下げて妙味を擧げて載せたい。

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	賜天覽	送料共	金壹圓八拾錢
法華經要義	全			金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	全			金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	全			金貳圓九拾錢
眞理の基礎に樹つ佛敎の信仰	全			金拾五錢
法華經要品	全			金五拾錢
日生上人レコード(四面)	全			金貳圓廿五錢
日蓮聖人	全			金拾錢
本尊意識に就て	全			金貳拾錢
釋尊の八相成道	全			金貳拾錢
法華經の心髓	全			金壹圓五拾錢
機部講事録	全			金壹圓七拾錢
本多日生上人	送料共			金拾錢
勳行作法	全			金壹圓
河合彰明著	送料共			金壹圓
皇道と日蓮主義	全			金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ七十  
財團法人統一出版部  
振替東京九四二〇番

月刊「教」誌

申込所 東京市小石川區音羽町六ノ七十  
振替口座東京一〇九四二〇番

發行所 金壹圓貳拾錢

一冊 金貳拾錢 送料壹錢  
半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共  
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意  
▲御申込へ總テ前金ノ事  
▲前金相切候節へ包紙ニ其旨表示可  
▲御購居ノ場合へ必ず新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十二年六月廿七日 印刷納本  
昭和十二年七月一日 發行

(第五百八號)

東京市小石川區音羽町六ノ十七  
編輯兼 磯部 滿 事  
發行人 磯部 英 二  
印刷所 野島好文堂印刷所  
電話牛込六九六六番

東京市小石川區音羽町六ノ十七  
財團法人統一團  
電話牛込五三三六番  
振替東京九四二〇番

